基礎看護学実習

Ⅰ　実習目的

健康障害により日常生活が未充足である対象を理解し、看護活動の基礎となる知識・技術・態度を修得する

Ⅱ　実習目標

1　療養している対象の気持ち、生活状況、療養環境が理解できる
2　基礎的看護技術を、対象の状態に合わせて実施できる能力を養う
3　看護過程を用いた看護過程の方法を学ぶ

Ⅲ　実習構成

3 単位（総時間数 135 時間）

基礎看護学実習Ⅰ-1
基礎看護学実習Ⅰ-2　―― 45 時間（1 単位）

基礎看護学実習Ⅱ　―― 90 時間（2 単位）

Ⅳ　実習施設

実習名	実習場所
基礎看護学実習Ⅰ-1 基礎看護学実習Ⅰ-2	新発田病院 リウマチセンター
基礎看護学実習Ⅱ	新発田病院 リウマチセンター

基礎看護学実習Ⅰ－1

Ⅰ　実習目的

療養している対象の気持ちや生活状況、療養環境が理解できる

Ⅱ　実習目標

1　対象の療養中の気持ちがわかる

2　対象の生活状況や療養環境がわかる

3　対象との接し方がわかる

Ⅲ　実習時期と実習時間：１年生　前期（７月中旬）

１６時間（基礎看護学実習Ⅰ-2と合わせて１単位）

Ⅳ　実習内容

実習目標	行動目標	実習内容
1. 対象の療養中の気持ちがわかる	1）病状・治療・検査などに対する意欲や不安について対象の言動や反応からわかる 2）家族や職場への心配事など入院が及ぼす影響について対象の言動や反応からわかる 3）医療従事者や同室患者への気遣いについて対象の言動や反応からわかる	1）対象の言動や表情、家族からの情報 2）病状・治療・検査などに対する意欲や受け止め方、不安 3）発達段階に応じた家庭内や職場の役割変化 4）医療従事者への気持ち、同室患者への配慮や遠慮
2. 対象の生活状況や療養環境がわかる	1）対象の生活状況（食事・排泄・睡眠・衣生活など）の観察ができ、入院が及ぼす影響についてわかる 2）病室環境（ベッド・室温・採光・音・空間・寝具など）について既習の知識と比較し、環境変化が及ぼす対象への影響についてわかる 3）安全・安楽・快適な生活を考えた病棟環境（トイレ・浴室・洗面所・デイルームなど）がわかる 4）治療や検査・看護を受けながら入院生活を送っていることがわかる	1）食事時間や内容の違い・排泄場所や方法・睡眠時間・衣生活の変化 2）入院前の生活習慣 3）ベッド間隔・室温・採光・音・空間・寝具の工夫点 4）トイレ・浴室・洗面所・ﾃﾞｲﾙｰﾑの安全管理や工夫点 5）治療や検査に伴う生活の制限と患者の心理面
3. 対象との接しがわかる	1）対象と話す時には、目線を合わせて話さなければならないことがわかる 2）敬語や丁寧な言葉を使った話し方がわかる 3）対象の状況に合わせたコミュニケーションの方法がわかる	1）患者の話しを傾聴する姿勢や態度 2）援助者としての身だしなみ、患者を尊重した話し方、プライバシーへの配慮 3 対象の発達段階、痛みや苦痛の有無、不安などを考慮した話し方

Ⅴ　実習方法

1　午前は看護師に同行する

2　午後は午前に訪問した患者を看護師と同行、または学生だけで訪問する

＊学生の担当看護師は患者に学生が来ることの了解を事前に得ておく

Ⅵ　実習記録

1　看護実践記録

2　基礎看護学実習Ⅰ－1学び

Ⅶ　実習評価

出席状況、実習内容、実習態度、実習記録等を総合して評価する

基礎看護学実習Ⅰ－2

Ⅰ　実習目的

基本的な看護技術を対象の状態に合わせて実施できる能力を養う

Ⅱ　実習目標

1　対象の日常生活行動の観察ができる

2　対象の状態に合わせた日常生活援助の留意点（工夫点）がわかる

3　対象の状態に合わせた日常生活援助の留意点（工夫点）をふまえた援助技術ができる

Ⅲ　実習時期：１年生　後期（12月中旬）

２９時間（基礎看護学実習Ⅰ－１と合わせて１単位）

Ⅳ　実習内容及び実習の技術項目

1　実習内容

実習目標	行動目標	実習内容
1. 対象の日常生活行動の観察ができる	1）対象の発達段階に合わせた生活背景を捉えることができる 2）対象の健康障害レベルが把握できる 3）対象のニードの充足状況を観察することができる	1）対象の発達段階の特徴と健康時の生活習慣の把握 2）急性期・回復期・慢性期・終末期の特徴と看護の視点 3）対象の日常生活行動の理解と、病状に伴う障害、規制の程度と自立度
2. 対象の状態に合わせた日常生活援助の留意点（工夫点）がわかる	1）対象の発達段階･健康レベルに関連させた留意点がわかる 2）対象のニードの充足状況に関連させた留意点がわかる 3）対象の安全・安楽に関連させた留意点がわかる	1）対象や家族が望む日常生活面、対象の心理面の理解と健康レベル（自立度）に応じた留意点 2）入院前の生活習慣 3）健康障害・規制の程度と自立度 4）安全・安楽に関連させた留意点 ・プライバシーへの配慮 ・苦痛に伴う不安や危険性、症状緩和の工夫
3. 対象の状態に合わせた日常生活援助の留意点（工夫点）をふまえた援助技術ができる	1）患者の反応を観察し、行動や表情・言葉に合わせたコミュニケーションを図る事が出来る 2）達段段階･健康レベルに関連させた援助技術が実施できる 3）安全・安楽に留意した援助技術が実施できる	1）対象の言動や表情、発達段階や病状を考えたコミュニケーション 2）指導のもとで援助技術の実践 ・援助に必要な言葉がけ ・留意点を意識した援助 ・基礎看護技術の原理・原則にそった実践 ・実施した援助の良い点、悪い点についての根拠づけ ・翌日の援助計画に、振り返った内容を反映する

2　実習の技術項目

1）バイタルサイン：腋窩検温、脈拍測定、呼吸測定、血圧測定

2）環境：病床環境、ベットメーキング、シーツ交換

3）活動：安楽な体位、体位変換、車椅子による移動、ストレッチャーによる移動、歩行介助

4）排泄：便器介助、尿器介助、オムツ交換

5）身体の清潔：入浴介助、シャワー浴介助、全身清拭（陰部洗浄含む）、手浴、足浴、洗髪、口腔ケア、義歯の洗浄と保管

6）衣生活：寝衣交換、

7）食事：食事前の準備、食事介助

Ⅴ　実習方法

1　一人の患者を受け持ち実習する

2　受け持ち患者に実施する援助技術を臨床指導者と一緒に選択する

Ⅵ　実習記録

1　受け持ち患者の情報記録用紙

2　受け持ち患者の援助計画と実践記録用紙

3　毎日の実習計画記録用紙

4　実習評価表

5　基礎看護学実習Ⅰ－2学び

Ⅶ　実習評価

1　実習評価表に基づき、出席状況、実習内容、実習態度、実習記録等を総合して評価する

基礎看護学実習Ⅱ

Ⅰ　実習目的

看護過程を用いた看護実践の方法を学ぶ

Ⅱ　実習目標

1　対象を理解するために必要なアセスメントができる

2　対象に生じている看護問題の明確化ができる

3　対象の看護問題について看護計画を立案することができる

4　看護計画に基づき、看護の実践ができる

5　実施した看護の評価ができる

Ⅲ　実習時期：２年生　後期（１１月中旬）　９０時間（２単位）

Ⅳ　実習内容

実習目標	行動目標	実習内容
1. 対象を理解するために必要なアセスメントができる	1）常在条件因子に関する情報収集と分析（読み取り）ができる 2）病理的状態の情報収集ができ、その分析（読み取り）ができる 3）ヘンダーソンのニードにおける情報収集と分析ができる 4）情報収集の方法がわかり、正確に情報を得ることができる	1）受け持ち患者の入院前の生活状況 ・身体的、精神的、社会・文化的側面 2）受け持ち患者の病理的状態 ・入院から受け持つまでの経過、診断名、現在の症状・主な治療・検査 3）ヘンダーソンの14項目ニード 4）収集した情報の整理・分析・解釈・統合 ・入院中と健康時の１日の過ごし方の相違 ・ニードの未充足の原因・誘因・関連因子についての考察
2. 対象に生じている看護問題の明確化ができる	1）それぞれの情報を関連づけた全体像が書ける 2）未充足状態、原因や誘因、成り行き、看護の方向性がわかる 3）原因・誘因をふまえた看護上の問題を見出すことができる	1）得られた情報を整理、全体像の表現 2）看護問題の優先順位 ・分析内容から対象に生じている問題を明確化し、優先度を生活に及ぼす影響の大きさから決定
3. 対象の看護問題について看護計画を立案することができる	1）看護目標をＲＵＭＢＡの法則を用いて評価可能な行動レベルで表現ができる 2）具体策の観察項目は、対象にあった具体的な項目内容で計画が立案できる 3）具体策の援助項目は５Ｗ１Ｈで表現された内容で計画が立案できる	1）発達段階の特性を考慮した看護援助の計画立案 ・看護目標は、ＲＵＭＢＡの法則を活用して立案 ・具体策は、観察計画（ＯＰ）、援助・処置計画（ＴＰ）、教育計画（ＥＰ）に分けて立案 ・援助内容は５Ｗ１Ｈを活用 ・生活習慣、入院中の１日の生活を考慮した具体的な計画立案
4. 看護計画に基づき、看護の実践ができる	1）患者の状態に応じた行動計画を修正し実施できる 2）患者の安全を考慮した援助の実施ができる 3）者の安楽を考慮した援助の実施ができる 4）知識に基づき、患者の状態に合わせた援助の実施ができる 5）患者の人格を尊重した、その人の気持ちを大切にした援助ができる	1）その日の患者の状態に応じた援助方法の変更 2）援助の了解を得るために目的、方法の説明と患者の反応の確認 3）手順、留意事項、観察の視点の理解 4）準備、実施、後片付け（患者・環境・物品） 5）安全・安楽、患者のプライバシーを守るための配慮 6）基礎看護技術の原理、原則にそった実践 7）援助中の言葉かけと患者の観察

	6) 看護援助の実施後は患者の反応をもとに援助内容を分析的に振り返ることができる 7) 前日の援助の振り返りを翌日の援助につなげることができる	8) 実施内容、実施中の観察事項および患者の反応を正しく記述 9) 報告の時期、方法の理解と実践 10) 毎日の計画の報告と助言に基づいた修正
5. 実施した看護の評価ができる	1) 患者の反応、変化から看護目標の達成状況が評価できる 2) 達成できた要因、達成できなかった要因から評価できる	1) 対象の反応や状態から目標達成を判断 2) 目標達成された要因、達成されなかった要因

Ⅴ　実習方法

一人の患者を受け持ち実習する

Ⅵ　実習記録

1　基礎看護学実習Ⅱ学びのレポート
2　実習評価表
3　毎日の看護実践記録
4　受け持ち患者記録
　① 情報Ⅰ（常在条件）用紙
　② 情報Ⅱ（病理的状態）用紙
　③ 情報Ⅲ（ﾍﾝﾀﾞｰｿﾝ 14 項目ﾆｰﾄﾞ）用紙
　④ 全体像用紙
　⑤ アセスメント用紙
　⑥ 看護計画用紙
　⑦ 評価用紙
　⑧ 基礎看護学実習Ⅱの学び

Ⅶ　実習評価

実習評価表に基づき、出席状況、実習内容、実習態度、実習記録等を総合して評価する

成人看護学実習

成人看護学実習Ⅰ（　急性期　）

Ⅰ．実習目的

手術を受ける対象と家族を理解し、急性期の生命維持・健康回復への援助ができる能力を養う

Ⅱ．実習目標

1．対象の発達課題と特徴、取り巻く環境に基づいて対象を理解する
2．対象の顕在・潜在する健康問題を身体・精神・社会的側面からアセスメントする
3．対象の顕在・潜在する健康問題の解決・回避に向けた個別的な看護計画を立案・実践・評価する
4．対象への看護実践を通して看護に対する価値を見出す
5．保健医療福祉における看護の役割・機能を理解し反応する

対象の状況：周手術期看護が必要な対象

９Ｂ病棟	・　胃癌・大腸癌・急性胆嚢炎・イレウス・急性腹膜炎　　など

Ⅲ．実習目標・行動目標・実習内容

実習目標	行動目標	実習内容
1．対象の発達課題と特徴、取り巻く環境に基づいて対象を理解する	1)手術を受ける対象の発達課題と身体的・精神的・社会的特徴を既習の知識と比較して説明できる	①□象の発達段階の情報をカルテやコミュニケーションから収集する ②□対象の身体的ならびに知的側面の情報をカルテやコミュニケーションから収集する ・聴覚障害　・視覚障害　・平衡覚障害　・触覚障害 ・感覚障害の有無、装具器具・自助具の有無 ・運動能力の低下の有無 ・知的能力は年齢と比べてどうか ③□社会・文化的側面の情報をカルテやコミュニケーションから収集する ・職業　・住居環境　・家族構成およびキーパーソン ・医療保険の種類　・社会資源の利用状況　・生きがい ・趣味　・信仰
	2)手術を受ける対象に生じている器質的変化・機能障害・症状について解剖生理を踏まえ説明できる	①　身体面の器質的変化・機能障害をカルテや担当医師や看護師の指導、対象の言動から情報収集する ・初期症状の発現から受け持ちまでの経過、病態生理、検査データ ②　対象に生じている症状を観察し、対象の言動を踏まえ情報収集する ・　疾患により生じている症状の有無
	3)手術を受ける対象に行われる検査・治療・処置の目的、概要について既習の知識と比較して説明できる	①　現在の検査・治療・処置をカルテから情報収集する ・治療：薬物・安静・運動・食事・手術・放射線・化学 ・酸素・その他 ②　現在の検査データをカルテから情報収集する ・疾患に必要な検査データの値

実習目標	行動目標	実習内容
	4)手術を受ける対象の健康状態やその変化が家庭や社会的役割に及ぼす影響についてどのように捉えているのか対象の言動や反応から説明できる	① 対象が入院することによって役割が変化することについての思いや考えを、対象とのコミュニケーションから情報収集する ・家庭での役割　・職場での役割　・地域での役割
	5)手術を受ける対象の基本的欲求の充足・未充足の状態を説明できる	①対象の入院前、入院後の基本的欲求の充足・未充足について、主観的データ・客観的データから情報収集する ・適切な飲食　・呼吸　・排泄 ・適切な姿勢の保持　・睡眠/休息 ・衣類の選択と着脱　・身体の清潔 ・環境/危険回避　・コミュニケーション　・学習
2．対象の顕在・潜在する健康問題を身体・精神・社会的側面からアセスメントする	1)手術を受ける対象の発達課題と身体的・精神的・社会的特徴から収集した情報を分析できる	①1-1)、1-2) で収集した対象の情報を講義で学んだ知識と比較して分析し、入院前の対象全体を分析する ・学んだ知識：成人（老年）看護学概論
	2)手術を受ける対象の基本的欲求の充足・未充足の状態を分析できる	① 1-3) で収集した対象の情報を解剖生理学・病態学の知識を用い現在の対象に生じている身体的状態を分析する ② 1ー4) で収集した対象の情報を充足・未充足の観点で分析する ・適切な飲食　・排泄　・適切な姿勢の保持 ・睡眠/休息　・衣類の選択と着脱　・身体の清潔 ・環境/危険回避　・コミュニケーション　・学習
	3)対象の顕在・潜在する健康問題とそれに関する因子について全体像を用い系統的に関連づける	①常在因子：入院前の状態、病態、基本的欲求の充足状況を関連させ図式化する
3．対象の顕在・潜在する健康問題の解決・回避に向けた個別的な看護計画を立案・実践・評価する	1)手術を受ける対象の健康問題を特定でき看護問題を決定できる	①対象の身体面・精神面・社会面に着目する ②表面化している問題だけではなく、今後起こり得る表面化していない問題にも着目する
		①□対象の健康問題の優先度を以下の観点から決定する ・身体侵襲の影響　・手術療法への不安　・術後合併症のリスク　・社会的役割の変化　・日常生活の変化 ・セルフケア/セルフマネジメント ②□優先度１位の健康問題の根拠を以下観点から分析する ・問題の原因・誘因 ・問題の成りゆき ・対象がその問題に対処できる体力・知力・意志力の有無と程度 ・看護の方向性
	2) 対象に合わせた看護計画を対象や家族とともに考え立案できる	①看護計画を以下の観点から計画する ・問題をあげた根拠 ・対象の個別性 ・対象や家族に内容・方法を相談しともに考える ②問題に対する対象の実現可能な目標を考え、対象や家族と共有し目標にともに向かう

実習目標	行動目標	実習内容
	3)対象が最良の状態で手術を受けられるように援助できる（援助できる方法が説明できる）	① 術前検査を基に対象の身体状態の理解と観察を行う ・呼吸機能検査　・心電図検査　・胸部レントゲン ・血液検査（栄養状態・電解質・肝・腎機能） ・24 時間 Ccr ② 術前状態から術後のリスクを予測する ③ 術前オリエンテーションの目的を理解し、個別性を考慮した指導を行う。 ・オリエンテーション内容の理解 ・対象と家族の不安への対処 ④ 麻酔科医師の術前診察および手術室・ICU の看護師の実施する術前訪問を見学する ⑤ 合併症予防のための術前訓練を実施する ・術前訓練の目的・方法の理解 ・術前訓練の指導・確認
	4)術前検査や処置における不安や苦痛を最小限にし、手術を受けられるように援助できる（援助できる方法が説明できる）	① 術前検査項目と目的を理解する ② 検査の説明、準備、前後の観察する ③ 術前検査結果、データの解釈する ④ 術前検査の援助をする ⑤ 術前処置内容と目的を理解する ⑥ 対象、家族の心理状態を観察する
	5)術後の対象を安全・安楽に迎える準備ができる	①術後の状態を予測し、病室環境を整える ・術後 bed の作成 ・術後の循環動態…心電図モニター　・電気毛布 間欠的空気圧迫法の準備 ・術後の呼吸状態…Spo_2 モニター、 酸素吸入療法の準備　・吸引
	6)手術および術中の状態変化を知ることにより、帰室後・術後の観察ができる(観察項目・観察方法が説明できる)	① 対象の手術見学を行う（別紙） ・麻酔導入までの精神的援助 ・麻酔導入・処置などの見学 ・手術体位取りの見学（神経障害、皮膚障害対策） ・出血量や尿量、術中変化 ・麻酔覚醒時の循環・呼吸状態の観察 ② 帰室後・術後の観察 ・全身状態、循環動態、呼吸状態、麻酔覚醒レベル、創部の状態（疼痛・ドレーン・創）、腹部状態 ・麻酔及び手術内容・経過の理解 ・対象や家族の不安軽減に向けた援助・労い ③ 術後の合併症を予測し予防のための援助を実施する ・術後合併症の原因と症状の理解 ・術後合併症の徴候観察、・術後合併症の援助
	7)術後の治療環境の中で安楽に療養ができるように援助できる	・麻酔導入までの精神的援助 ・麻酔導入・処置などの見学 ・手術体位取りの見学（神経障害、皮膚障害対策） ・出血量や尿量、術中変化 ・麻酔覚醒時の循環・呼吸状態の観察

実習目標	行動目標	学習内容
	8）離床に伴う不安に共感しながら、術後の合併症を予測し予防するための援助ができる	①□離床による生体変化・気持ちの把握 ②□安全安楽な離床への援助 ③□術後経過日数や病状・自立度を考察しながら、日常生活行動の範囲を広げていく ④□対象が術後経過に関心が持て、状況が理解できるように関わる
	9）術後の治療処置、検査の援助ができる	①創処置 ②輸液管理・呼吸管理 ③ドレーン・ガーゼ類の管理 ④検査（血液検査・レントゲン撮影検査）
	10）退院後の生活・活動状況に応じた生活指導ができる	①退院への不安と生活状況の把握 ②現在の健康レベルで可能な生活が送れるように具体的方法を対象・家族と考える
	11）設定した目標や計画、実施が対象にとって最良の状態であるかどうかを評価し修正できる	①実施した看護が目標に向かっているか、達成度 ③　目標は現在の対象や家族の状態にあっているか ④　看護計画の内容は現在の対象や家族の状態にあっているか
4．対象への看護実践を通して看護に対する価値を見出す	1)具体的看護場面を通して、手術を受ける対象・家族が健康回復に向かうための看護の必要性について自分の考えを示す	①経験したことから看護に対する自分の考えを持つ
	2)救命センター実習を通してクリティカルケア看護に対する自分の考えを示す	①経験したことから看護に対する自分の考えを持つ
	3）手術を受ける対象への安全・安楽・倫理に配慮した看護実践に向けた知識・技術・態度を修得する機会を求めることができる	①看護技術経験録のレベルⅠ・Ⅱの内容の修得
	4）カンファレンスで自分の意見が述べられ、グループメンバーと意見の共有をしようとすることができる	①テーマカンファレンス・週末カンファレンスで自分の意見を述べるとともに、メンバーと意見を共有する（アサーティブ）
5．保健医療福祉における看護の役割・機能を理解し反応する	1）対象や家族への関心・思いやりを態度で示すことができる	①受け持ち患者の社会資源に関する知識
	2）対象の保健医療福祉チームの中でのチームワークの必要性を説明する	①対象や家族の看護実践を通して、看護師の役割・機能に対する自分の考えを持つ
	3）対象への影響や不利益を考慮し、看護職者としての自己の健康（身体面・精神面）を十分に管理して実習に臨む	

Ⅳ．実習方法

1．受け持ち患者を決め、看護過程のプロセスにそって実習展開する。

Ⅴ．実習記録

1．受け持ち患者記録
　1）情報用紙Ⅰ（様式1）
　2）情報用紙Ⅱ（様式2）
　3）情報用紙Ⅲ（様式3）
　4）全体像（様式4）
　5）受け持ち患者の問題　優先順位用紙（様式5）
　6）アセスメント用紙（様式6）
　7）看護計画用紙（様式7）
　8）評価用紙（様式8）
2．成人看護学実習評価表
3．成人看護学実習学びのレポート
4．毎日の実習記録（様式9—1，9—2）
5．看護技術経験録
6．事前学習

Ⅵ．実習評価

実習評価表に基づき評価する

成人看護学実習Ⅰ　受け持ち患者の手術見学

資料１

Ⅰ　実習目的

受持ち対象の手術を見学し、術後の看護にいかす

Ⅱ　実習目標

１　手術の見学を通して、術後の観察点や援助の根拠がわかる
２　手術を受ける対象・家族の心理を理解することができる
３　手術室での看護を学ぶ

実習目標	行動目標	実習内容
１　手術の見学を通して、術後の観察点や援助の根拠がわかる ２　手術を受ける対象・家族の心理を理解することができる ３　手術室での看護を学ぶ	１）手術室入室に伴う対象の不安に対する援助を見学する	１）術前訪問の同行を通して、手術に対する不安を把握する ①手術室看護師と情報交換し対象の不安への援助に活かす ②術中・術後の注意事項（リスク）について予測する ２）入室時の対象への援助を見学する ①表情など観察し、言葉をかける ・言葉かけ、タッチングを行う ・対象の傍らに寄り添う ②入室時の援助の見学 ・手術台への移動への援助 ・掛け物の調整、保温など ・各種モニター類の装着
	２）麻酔導入から手術迄の処置や手術操作の一連の流れを見学する	１）麻酔導入から手術の見学をする ＊事前学習と結びつけながら見学する ＜麻酔導入までの見学＞ ①硬膜外麻酔法の見学 ②尿留置カテーテルの挿入 ③胃管カテーテルの挿入 ④手術時の体位や保持の状態 ⑤気管内挿管とその介助見学 ⑥全身麻酔導入 ・気管内挿管、全身麻酔に伴う呼吸系、循環器系への影響を結びつけて考える ＜術中の見学＞ ①術式（切除部位、範囲） ②手術創の状態 ③ドレーンの種類と挿入部位、及びドレーン管理方法

実習目標	行動目標	実習内容
		④呼吸状態の管理（酸素吸入、吸引、SaO_2モニター、人工呼吸器） ⑤循環動態の管理（輸液、輸血、薬物、輸液ポンプ、尿量、出血量、ＥＣＧモニター） ⑥手術時体位とその影響
	３）麻酔覚醒時の対象の状態がわかり、術後の観察点や援助の意味を理解することができる	１）麻酔覚醒時の不安定な状態がわかる ・術後の呼吸器合併症の危険性と関連づけて観察する。 ・術後ベッドの準備や援助と関連づける ２）覚醒時のバイタルサインや四肢冷感悪寒の状態から循環系の観察項目と保温の必要性を理解する ３）抜管と麻酔覚醒状態を見学する ・覚醒状態（呼名反応・掌握反応） ・バイタルサイン ・呼吸状態…気道分泌物の貯留状況気道確保と吸引操作方法 ・循環動態…四肢冷感・悪寒・戦慄などの観察と援助方法 ４）術後の生体反応を考えて、観察項目を上げ、帰室時の観察に活かす ＊事前学習を十分しておく
	４）覚醒時、対象に言葉をかけ不安への援助ができる	１）覚醒時に「手術が終了しました。これから病室へ帰りますね」などの言葉かけをする ２）手術台からストレチャーへの移動時の言葉かけ、タッチングを行う
	５）病棟看護師への申し送り内容がわかる	１）病棟看護師への申し送りを見学する ＊申し送り前に間接介助者と確認 ・麻酔種類、術式、術中体位 ・覚醒状態と術中の変化 ・バイタルサイン変化と使用薬剤 ・出血量、水分出納（IN／OUT） ・術中輸血の有無、輸血の有無 ・ドレーンの種類、挿入部位、装着物

実習目標	行動目標	実習内容
	6）病棟看護師とともに、安全に病棟へ移送できる	・医師からの指示内容 術後の薬物投与、肢位固定等 ＊「～に注意してください」などの申し送り内容に注目する 1）病棟看護師の指導のもとで、全身状態を観察しながら病棟まで移送する 2）ベッドへの移動、観察等 間欠的空気圧迫装置の確認

Ⅲ　実習方法

1　術前訪問の同行

■　受持ち対象の術前訪問に同行する。

1）術前訪問に同行し、手術室看護師がどのような情報を得て訪問しているか見学する。
その後、術中管理における注意点や危険性について助言をもらう。

2）麻酔科医師による術前訪問もあるので、併せて見学させてもらう。

2　手術前日

1）「手術見学依頼書」に所定の内容を記載し、提出する。

2）手術見学に必要な事前学習をする。（術式、麻酔、術中看護　等）

4　手術当日

1）手術室入室までと術直後の行動については、病棟の担当看護師と打ち合せをして行動する。

2）手術室入室後は、間接介助者（担当看護師）の指導を受けて行動する。

5　服装

1）手術室実習着と帽子・マスクを着用する。

Ⅳ　実習記録

1）手術見学依頼書

2）手術見学実習記録

Ⅰ　実習目的

クリティカルな状態にある対象に対する集中治療の必要性を理解し、対象および家族に対する救命救急センターにおける治療及び看護を学ぶ

Ⅱ　実習目標

1　救命救急センターの機能と役割を理解する

2　クリティカルな状態にある対象及び家族への看護を理解する

実習目標	行動目標	実習内容
1　救命救急センターの機能と役割を理解する	1）救急センターの機能と役割を説明する	1）病床数(ICU, CCU, HCU, 熱傷ﾍﾞｯﾄﾞ)、看護体制 2）集中治療室の環境 ・感染予防、医療器具機器の管理、看護を受ける対象・家族の視点 3）集中治療室の適応対象 ・　脳疾患患者、開頭術術後患者 ・　心筋梗塞患者 ・　熱傷患者 ・　人工呼吸器装着患者 ・　食道がん術後患者 4）　一般病棟との連携、他職種との連携 5）　看護記録、診療記録
2　クリティカルな状態にある対象及び家族への看護を理解する	1）受持ち対象（入室予定患者も含む）の治療や看護を説明する	1）　入室中の受持ち対象 ・　申し送り ・　現在までの経過 ・　本日の看護計画実施予定 2）　入室および退室予定の対象の準備や対象・家族との関わり 3）　術後の対象の受け入れ準備 4）　本人や家族への入室オリエンテーション 5）　退室の手続き 6）　申し送り
	2）クリティカルな状態にある対象の看護を説明する	1）脳神経 (1)　観察内容(意識レベル、瞳孔反射、反射等) (2)　データの見方、アセスメント (3)　治療と看護の実際 脳室・脳槽ドレナージ等 2）呼吸器 (1)　観察内容（呼吸音、血液ガス等） (2)　データの見方、アセスメント (3)　治療と看護の実際 人工呼吸器の取り扱い、看護

実習目標	行動目標	実習内容
		3） 循環器 (1) 観察内容（心電図） (2) データの見方、アセスメント (3) 治療と看護の実際 輸液・輸血管理、薬剤、ペーシング、PCPS、IABP 等 4）栄養・代謝 (1) データの見方、アセスメント (2) 治療と看護の実際 輸液管理・輸血、CV 等 5）モニター管理、ドレーン管理 (1) 観察内容 (2) モニター等のチューブ類の種類 心電図、Ａライン、スワンガンツカテーテル、ドレーン、ＣＶ、等 6） 緩和ケア (1) 観察内容と方法、アセスメント (2) 治療と看護の実際 安楽な体位、コミュニケーション、タッチング、セデーション等 7）コミュニケーション (1) 非言語的コミュニケーション (2) さまざまなコミュニケーション方法 8）日常生活の援助 ・清潔　・排泄　・食事　・移動　・更衣　など 9）精神面に対する援助 (1) 精神状態の観察 (2) せん妄・ICU シンドロームの予防と対策 (3) 家族の面会への配慮 １０）安全管理 (1) 事故防止 (2) 感染予防等

Ⅲ　実習方法

1）看護師の指導のもとで、１日実習を行なう。
2）成人看護学実習Ｉの一部として、実習する。
3）事前学習
・救命処置（気管内挿管方法、除細動器・輸液ポンプの取り扱い、使用する薬剤）
・人工呼吸器装着中の看護
・ＭＥ機器装着中の看護、モニター装着中の看護
・クリティカルな状態にある対象および家族の看護（成人臨床看護Ｉの講義内容）

Ⅳ　実習記録

1）救命救急センター実習記録

成人看護学実習Ⅱ（慢性期）

Ⅰ．実習目的

慢性期にある対象と家族を理解し、生涯にわたるセルフケア・セルフマネジメントを促す看護ができる能力を養う

Ⅱ．実習目標

1．対象の発達課題と特徴、取り巻く環境に基づいて対象を理解する
2．対象の顕在・潜在する健康問題を身体・精神・社会的側面からアセスメントする
3．対象の顕在・潜在する健康問題の解決・回避に向けた個別的な看護計画を立案・実践・評価する
4．対象への看護実践を通して看護に対する価値を見出す
5．保健医療福祉における看護の役割・機能を理解し反応する

Ⅲ．実習構成：２単位　９０時間

1．対象の状況：慢性病をもちセルフケア・セルフマネジメントが必要な対象

・心筋梗塞　・狭心症　・弁膜症　・心不全　・解離性大動脈瘤　・不整脈　など
・肝硬変　・肝がん　・胆管がん　・胆嚢がん　・胃がん　・大腸がん　・慢性腎不全　・糖尿病　など
・白血病　・悪性リンパ腫　・肺がん（化学療法）　・間質性肺炎　・慢性閉塞性肺疾患　・肺炎　など
・慢性関節リウマチ　など

2．実習施設
県立新発田病院（病棟）、県立リウマチセンター（病棟）

Ⅳ．実習目標・行動目標・実習内容

実習目標	行動目標	実習内容
1．対象の発達課題と特徴、取り巻く環境に基づいて対象を理解する	1）対象の発達課題と身体的・精神的・社会的特徴（家庭、職場、地域社会での役割）を説明する	①対象の発達段階の情報をカルテやコミュニケーションから収集する ②対象の身体的ならびに知的側面の情報をカルテやコミュニケーションから収集する ・聴覚障害　・視覚障害　・平衡覚障害　・触覚障害　・感覚障害の有無、装具器具・自助具の有無 ・運動能力の低下の有無 ・知的能力は年齢と比べてどうか ③社会・文化的側面の情報をカルテやコミュニケーションから収集する ・職業　・住居環境　・家族構成およびキーパーソン　・医療保険の種類　・社会資源の利用状況　・生きがい・趣味　・信仰
	2）対象の健康状態やその変化が家庭、職場、地域社会での役割に及ぼす影響についてどのように捉えているのか対象の言動や反応から説明する	①対象が入院することによって役割が変化することについての思いや考えを、対象とのコミュニケーションから情報収集する ・家庭での役割　・職場での役割　・地域での役割

実習目標	行動目標	実習内容
	3）対象に生じている器質的変化・機能障害・症状、検査・治療・処置、検査データについてカルテや医療スタッフの指導、対象の言動から説明する	①身体面の器質的変化・機能障害をカルテや担当医師や看護師の指導、対象の言動から情報収集する ・初期症状の発現から受け持ちまでの経過、病態生理、検査データ ②対象に生じている症状を観察し、対象の言動を踏まえ情報収集する ・疾患により生じている症状の有無 ③現在行われている検査・治療・処置をカルテから情報収集する ・治療：薬物・安静・運動・食事・手術・放射線・化学・酸素・その他 ④現在の検査データをカルテから情報収集する ・疾患に必要な検査データの値
	4）対象の基本的欲求の充足・未充足の状態を説明する	①対象の入院前、入院後の基本的欲求の充足・未充足について、主観的データ・客観的データから情報収集する ・適切な飲食　・排泄　・適切な姿勢の保持　・睡眠/休息　・衣類の選択と着脱　・身体の清潔　・環境/危険回避　・コミュニケーション　・学習
2．対象の顕在・潜在する健康問題を身体・精神・社会的側面からアセスメントする	1)対象の発達段階と身体的・精神的・社会的特徴から収集した情報を既習の知識と比較して分析する	①1-1）、1-2）で収集した対象の情報を講義で学んだ知識と比較して分析し、入院前の対象全体を分析する ・学んだ知識：成人（老年）看護学概論
	2)対象に生じている器質的変化・機能障害・症状、検査・治療・処置、検査データについて収集した情報を解剖生理を踏まえ分析する	①1-3）で収集した対象の情報を解剖生理学・病態学の知識を用いて現在の対象に生じている身体的状態を分析する
	3)対象の基本的欲求の充足・未充足の状態を分析する	①1－4）で収集した対象の情報を充足・未充足の観点で分析する ・適切な飲食　・排泄　・適切な姿勢の保持 ・睡眠/休息　・衣類の選択と着脱　・身体の清潔　・環境/危険回避　・コミュニケーション ・学習
	4)対象の顕在・潜在する健康問題とそれに関する因子について全体像を用い系統的に関連づける	①常在因子：入院前の状態、病態、基本的欲求の充足状況を関連させ図式化する
	5)対象の発達課題と身体的・精神的・社会的特徴を踏まえ、顕在・潜在する問題を決定する	①対象の身体面・精神面・社会面に着目する ②表面化している問題だけではなく、今後起こり得る表面化していない問題にも着目する

実習目標	行動目標	実習内容
	6)対象の健康問題の優先度を合併症の出現、日常生活の変化、セルフケア・セルフマネジメント、「揺らぎ」の観点から決定する	①対象の健康問題の優先度を以下の観点から決定する ・合併症の出現　・日常生活の変化　・セルフケア/セルフマネジメント　・回復したい気持ちと希望のなさや無力感で揺らぐ対象の気持ち
3．対象の顕在・潜在する健康問題の解決・回避に向けた個別的な看護計画を立案・実践・評価する	1)優先度の高い健康問題の根拠を原因・誘因、成り行き、患者の対処能力から分析する	①優先度１位の健康問題の根拠を以下の観点から分析する ・問題の原因・誘因 ・問題の成りゆき ・対象がその問題に対処できる体力・知力・意志力の有無と程度 ・看護の方向性
	2)実施したアセスメント、エンパワメントの考えに基づき、対象の個別状況に合わせた看護計画を対象や家族とともに立案する	①看護計画を以下の観点から計画する ・問題をあげた根拠 ・対象の個別性 ・対象や家族に内容・方法を相談しともに考える
	3)エンパワメントの考えに基づき対象や家族の実現可能な目標を対象や家族とともに共有する	①問題に対する対象の実現可能な目標を考え、対象や家族と共有し目標にともに向かう
	4)対象の病状悪化・合併症予防のために、対象の症状・反応の変化を観察しながら、安全・安楽に配慮した援助を実施する	①対象の身体状態の理解と観察 ②身体状態悪化・合併症の徴候の理解と観察 ③病状悪化・合併症予防のための援助 ④援助の際は対象のバイタルサイン、症状悪化の有無、言動や表情、態度に着目して実施する ⑤対象にとっての安全・安楽考え、配慮しながら援助を実施する
	5)回復への期待と無力感や希望がない気持ちで揺らぐ対象および家族への精神面への援助を実施する	①対象や家族の揺らぐ気持ちをコミュニケーションの中で把握 ②回復状況の把握 ③傾聴・受容的態度・共感的態度
	6)セフルケア・セルフマネジメントに向けて、対象やその家族の自己効力感に着目し、意欲を引き出す関わりを実施する	①対象やその家族の意欲を引き出すために、自己効力感の高低を把握して関わる ・遂行行動の成功体験 ・代理的経験（モデリング） ・言語的説得 ・生理的・情動的状態 ②ADL、自立度の確認 ・セルフケアの程度、自助具の使用の有無 ③キーパーソンの把握 ④家族や周囲の人との協力体制と連携 ⑤医療チームとの連携 ・看護スタッフとの情報交換 ・カンファレンスへの参加（Dr,PT,OT,ST,MSW など）

実習目標	行動目標	実習内容
	7)ライフスタイルや発達課題と関連付けて、対象の退院後の生活の再構築・セルフケア・セルフマネジメントに向けた指導を行動変容ステージモデルを用いて対象や家族に実施する	①対象のライフスタイルや発達課題、退院後の生活、セルフケア・セルフマネジメントの程度を理解し、指導内容の検討 ・疾患の知識 ・治療の知識 ・悪化予防の知識 ・社会資源活用の情報提供 ・セルフケアの方法 ・セルフマネジメントの方法 など ②対象や家族の行動変容ステージモデルの段階把握 ・無関心期　・関心期　・準備期　・実行期　・維持期 ③行動ステージに合った方法 ・意識の高揚　・感情的体験　・環境の再評価　・自己の再評価　・自己の解放　・行動置換　・援助関係　・強化マネジメント　・刺激の統制 ④年齢や理解度を考え指導方法検討 ・日時、場所、媒体、順序 ・面接・対話形式 ・パンフレット・ビデオ活用 ・体験・デモンストレーション ・実物提示・説明 など ⑤指導実施後の対象や家族の理解度確認 ・評価視点の明確化 ・疑問点や理解していない点については再指導
	8）設定した目標や計画、実施が対象にとって最良の状態であるかどうかを評価し修正する	①実施した看護が目標に向かっているか、達成度 ②目標は現在の対象や家族の状態に合っているか ③看護計画の内容は現在の対象や家族の状態に合っているか
4．対象への看護実践を通して看護に対する価値を見出す	1）具体的な看護実践場面をもとに、疾病の再発予防、セルフケア・セルフマネジメントに向けた看護の必要性について自分の考えを示す	①経験したことから看護に対する自分の考えを持つ
	2）ライフスタイルや発達課題、健康レベルと関連づけて、対象の身体的・精神的・社会的な変化や揺れ動く気持ちに対する看護の意義を認める	①経験したことから看護に対する自分の考えを持つ
	3）対象への安全・安楽・倫理に配慮した看護実践に向けた知識・技術・態度を修得する機会を求める	①看護技術経験録のレベルⅠ・Ⅱの内容の修得

実習目標	行動目標	実習内容
	4）カンファレンスで自分の意見が述べられ、グループメンバーと意見の共有をしようとする	①テーマカンファレンス・週末カンファレンスで自分の意見を述べるとともに、メンバーと意見を共有する（アサーティブ）
5．保健医療福祉における看護の役割・機能を理解し反応する	1）対象にとっての自立・自律した生活を再構築を目指し、必要な社会資源の活用について説明する	①受け持ち患者の社会資源に関する知識
	2）対象の保健医療福祉チームの中での看護師の役割・機能を説明する	①対象や家族の看護実践を通して、看護師の役割・機能に対する自分の考えを持つ
	3）対象への影響や不利益を考慮し、看護職者としての自己の健康（身体面・精神面）を十分に管理して実習に臨む	
	4)対象や家族への関心・思いやりを態度で示す	

Ⅴ．実習方法

1．受け持ち患者を決め、看護過程のプロセスにそって実習展開する。
　1）可能な範囲で年齢は18～65歳（65歳以下の患者がいない場合は～74歳までとする）、慢性病をもち日常生活の自己管理が必要な対象とする。ただし、成人期や慢性病をもった対象者がいない場合、受け持った対象から学べることを学ぶ。
　2）講義で学んだ解剖生理学や病理学、病態生理、成人看護学概論（エンパワーメント・行動変容ステージ・自己効力感）、成人臨床看護の知識と技術、対象への関心や思いやりを統合し実践する。

Ⅵ．実習記録

1．受け持ち患者記録
　1）情報用紙Ⅰ（様式1）
　2）情報用紙Ⅱ（様式2）
　3）情報用紙Ⅲ（様式3）
　4）全体像（様式4）
　5）受け持ち患者の問題　優先順位用紙（様式5）
　6）アセスメント用紙（様式6）
　7）看護計画用紙（様式7）
　8）評価用紙（様式8）
2．成人看護学実習評価表
3．成人看護学実習学びのレポート
4．毎日の実習記録（様式9－1，9－2）
5．看護技術経験録
6．事前学習

Ⅶ．実習評価

実習評価表に基づき評価する

成人看護学実習Ⅲ（終末期）

Ⅰ．実習目的

終末期にある対象と家族を理解し、その人らしく生が全うできるように身体的・精神的・社会的・スピリチュアル的苦痛の緩和のための看護ができる能力を養う

Ⅱ．実習目標

1．対象の発達課題と特徴、取り巻く環境に基づいて対象を理解する
2．対象の顕在・潜在する健康問題を身体・精神・社会的側面からアセスメントする
3．対象の顕在・潜在する健康問題の解決・回避に向けた個別的な看護計画を立案・実践・評価する
4．対象への看護実践を通して看護に対する価値を見出す
5．保健医療福祉における看護の役割・機能を理解し反応する

Ⅲ．実習構成：2単位　９０時間

1．対象の状況：治癒が困難な状況にある対象、終末期の対象

・肝硬変　・肝がん　・胆管がん　・胆嚢がん　・胃がん　・大腸がん　・膵がん　など
・白血病　・悪性リンパ腫　・肺がん　・間質性肺炎　など

2．実習施設
県立新発田病院（病棟）

Ⅳ．実習目標・行動目標・実習内容

実習目標	行動目標	実習内容
1．対象の発達課題と特徴、取り巻く環境に基づいて対象を理解する	1）対象の発達課題と身体的・精神的・社会的特徴（家庭、職場、地域社会での役割）を説明する	①対象の発達段階の情報をカルテやコミュニケーションから収集する ②対象の身体的ならびに知的側面の情報をカルテやコミュニケーションから収集する ・聴覚障害　・視覚障害　・平衡覚障害　・触覚障害　・感覚障害の有無、装具器具・自助具の有無 ・運動能力の低下の有無 ・知的能力は年齢と比べてどうか ③社会・文化的側面の情報をカルテやコミュニケーションから収集する ・職業　・住居環境　・家族構成およびキーパーソン　・医療保険の種類　・社会資源の利用状況　・生きがい・趣味　・信仰
	2）対象の健康状態やその変化が家庭、職場、地域社会での役割に及ぼす影響についてどのように捉えているのか対象の言動や反応から説明する	①対象が入院することによって役割が変化することについての思いや考えを、対象とのコミュニケーションから情報収集する ・家庭での役割　・職場での役割　・地域での役割

実習目標	行動目標	実習内容
	3）対象に生じている器質的変化・機能障害・症状、検査・治療・処置、検査データについてカルテや医療スタッフの指導、対象の言動から説明する	①身体面の器質的変化・機能障害をカルテや担当医師や看護師の指導、対象の言動から情報収集する ・初期症状の発現から受け持ちまでの経過、病態生理、検査データ ②対象に生じている症状を観察し、対象の言動を踏まえ情報収集する ・疾患により生じている症状の有無 ③現在行われている検査・治療・処置をカルテから情報収集する ・治療：薬物・安静・運動・食事・手術・放射線・化学・酸素・その他 ④現在の検査データをカルテから情報収集する ・疾患に必要な検査データの値
	4）対象の身体的・精神的・社会的・スピリチュアル的苦痛を説明する	①対象の身体的・精神的・社会的・スピリチュアル的苦痛について、入院前、入院後の基本的欲求の観点を含め、主観的データ・客観的データから情報収集する ・適切な飲食　・排泄　・適切な姿勢の保持 ・睡眠/休息　・衣類の選択と着脱　・身体の清潔　・環境/危険回避　・コミュニケーション ・学習
	5）対象の「その人らしさ」を説明する	①対象のその人らしさをつくりあげているものを説明する ・価値観　・生活習慣　・人生で大切にしてきたことなど
2．対象の顕在・潜在する健康問題を身体・精神・社会的側面からアセスメントする	1)対象の発達段階と身体的・精神的・社会的特徴から収集した情報を既習の知識と比較して分析する	①1-１)、1-2）で収集した対象の情報を講義で学んだ知識と比較して分析し、入院前の対象全体を分析する ・学んだ知識：成人（老年）看護学概論
	2)対象に生じている器質的変化・機能障害・症状、検査・治療・処置、検査データについて収集した情報を解剖生理を踏まえ分析する	①1-3）で収集した対象の情報を解剖生理学・病態学の知識を用いて現在の対象に生じている身体的状態を分析する
	3)対象の身体的・精神的・社会的・スピリチュアル的苦痛を分析する	①１－４）で収集した対象の身体的・精神的・社会的・スピリチュアル的苦痛を基本的欲求の観点も含め分析する ・適切な飲食　・排泄　・適切な姿勢の保持 ・睡眠/休息　・衣類の選択と着脱　・身体の清潔　・環境/危険回避　・コミュニケーション ・学習
	4)対象の全人的苦痛について全体像を用い系統的に関連づける	①常在因子：入院前の状態、その人らしさ、病態から身体的・精神的・社会的・スピリチュアル的苦痛を関連させ全人的苦痛をつくりあげている状態を図式化する

実習目標	行動目標	実習内容
	5)対象の発達課題と身体的･精神的･社会的･スピリチュアル的苦痛を踏まえ、顕在･潜在する看護問題を決定する	①対象の身体面・精神面・社会的・スピリチュアル的苦痛に着目する ②表面化している問題だけではなく、今後起こり得る表面化していない問題にも着目する
	6）対象の健康問題の優先度を「全人的苦痛」「その人らしさ」「安楽」の観点から決定する	①対象の健康問題の優先度を以下の観点から決定する ・全人的苦痛　・その人らしさ　・安楽
3．対象の顕在・潜在する健康問題の解決･回避に向けた個別的な看護計画を立案・実践・評価する	1）健康問題の根拠を原因・誘因、成り行き、患者の対処能力から分析する	①健康問題の根拠を以下の観点から分析する ・問題の原因・誘因 ・問題の成りゆき ・対象がその問題に対処できる体力・知力・意志力の有無と程度 ・看護の方向性
	2）実施したアセスメント、エンパワメントの考えに基づき、対象や家族のニードや望みに注意を傾け、個別状況に合わせた看護計画を対象や家族とともに立案する	①看護計画を以下の観点から計画する ・問題をあげた根拠 ・対象や家族のニードや望み ・対象の個別性 ・対象や家族に内容・方法を相談しともに考える
	3）エンパワメントの考えに基づき、対象や家族のニードや望みに注意を傾け、対象や家族の実現可能な目標を対象や家族とともに共有する	①問題に対する対象の実現可能な目標を考え、対象や家族と共有し目標にともに向かう
	4）対象の身体的苦痛を最小限にするために、対象の症状・反応の変化を観察しながら、対象や家族自身がよりよい方向を選択しながら、安全・安楽に配慮した援助を（家族とともに）実施する	①対象の身体的苦痛の理解と観察 ②身体的苦痛悪化の徴候の理解と観察 ③身体的苦痛緩和のための援助 ・足浴　・手浴　・マッサージ　・リラクセーションなど ④援助の際は対象のバイタルサイン､症状悪化の有無､言動や表情、態度に着目して実施する ⑤対象にとっての安全・安楽考え、配慮しながら援助を実施する
	5）対象や家族の精神的苦痛を最小限にするために、受容過程（キュブラ―ロスの死の受容過程･コーンの障害受容過程）をもとに対象に合った精神的援助を実施する	①受容過程の理解とアセスメント ②各過程に応じた援助 ・傾聴・受容的態度・共感的態度　　など
	6）対象や家族のスピリチュアル的苦痛を最小限にするために、対象や家族が生きてきた軌跡や考え方を引き出し、人生の振り返りができる援助を実施する	①対象や家族のこれまでの人生の語りを引き出す ・コミュニケーションスキル ・傾聴　・共感的態度　・支持的態度
	7)対象の｢その人らしさ｣をとらえ QOL 向上・維持のための援助を実施する	①その人らしさの理解 ②対象や家族にとっての QOL の理解 ③対象や家族が望む QOL の援助 ・日常生活が望むレベルでおくれるよう援助する

実習目標	行動目標	実習内容
	8）設定した目標や計画、実施が対象にとって最良の状態であるかどうかを評価し修正する	①実施した看護が目標に向かっているか、達成度 ②目標は現在の対象や家族の状態に合っているか ③看護計画の内容は現在の対象や家族の状態に合っているか
4．対象への看護実践を通して看護に対する価値を見出す	1）具体的な看護実践場面をもとに、対象の安楽に向けた看護の必要性について自分の考えを示す	①経験したことから看護に対する自分の考えを持つ
	2）対象への看護を通して、生と死について自分の考えを示す	①経験した看護から生と死に対する自分の考え＜死生観＞を持つ
	3）対象への安全・安楽・倫理に配慮した看護実践に向けた知識・技術・態度を修得する機会を求める	①看護技術経験録のレベルⅠ・Ⅱの内容の修得
	4）カンファレンスで自分の意見が述べられ、グループメンバーと意見の共有をしようとする	①テーマカンファレンス・週末カンファレンスで自分の意見を述べるとともに、メンバーと意見を共有する（アサーティブ）
5．保健医療福祉における看護の役割･機能を理解し反応する	1）危篤状態にある対象・家族、または死亡した場合の対象・家族への看護師の役割・機能を説明する	①危篤状態にある対象・家族への看護 ②死亡した場合の対象・家族への看護 ＊グループ内で経験がない場合は、臨床での経験を聴き考える
	2）対象や家族にとっての看護師の存在の意義について自分の考えを示す	①看護師の存在自体が対象や家族に緩和的に働く意義 ・対象や家族の思いを受けとめることの意義 ・対象や家族の言葉を聴く意義 ・対象や家族を理解することの意義 ・苦痛を緩和する意義
	3）対象への影響や不利益を考慮し、看護職者としての自己の健康（身体面・精神面）を十分に管理して実習に臨む	
	4)対象や家族への関心･思いやりを態度で示す	

Ⅴ．実習方法

1．受け持ち患者を決め、看護過程のプロセスにそって実習展開する。

1）可能な範囲で年齢は 18～65 歳（65 歳以下の患者がいない場合は～74 歳までとする）、慢性病をもち日常生活の自己管理が必要な対象とする。ただし、成人期や慢性病をもった対象者がいない場合、受け持った対象から学べることを学ぶ。

2）講義で学んだ解剖生理学や病理学、病態生理、臨床看護総論Ⅰ（終末期）、成人看護学概論（成人の対象理解と発達課題）、成人臨床看護の知識と技術、対象への関心や思いやりを統合し実践する。

Ⅵ．実習記録

1．受け持ち患者記録

1）情報用紙Ⅰ（様式 1）

2）情報用紙Ⅱ（様式 2）

3）情報用紙Ⅲ（様式 3）

4）全体像（様式 4）

5）受け持ち患者の問題　優先順位用紙（様式5）
6）アセスメント用紙（様式6）
7）看護計画用紙（様式7）
8）評価用紙（様式8）

2．成人看護学実習評価表
3．成人看護学実習学びのレポート
4．毎日の実習記録（様式9－1，9－2）
5．看護技術経験録
6．事前学習
・事前レポート：「生と死に対する自分の考え」

Ⅶ．実習評価

実習評価表に基づき評価する

資料3

― 健康段階別実習内容一覧 ―

健康段階	健康段階の概念	実習目的	実習目標	学習内容	対象の状況	対象例
急性期	◎急激に発症し症状の変化の著しい状態にあり、医療従事者の援助を受けなければ健康レベルが改善しない時期 【特徴】 ・症状変化が激しい。 ・身体的苦痛が強い ・生命の危機に直面している。 ・患者・家族の不安や動揺が強い。	手術を受ける対象と家族を理解し、急性期の生命維持健康回復への援助ができる能力を養う。	1．対象の発達課題と特徴、取り巻く環境に基づいて対象を理解する 2．対象の顕在・潜在する健康問題を身体・精神・社会的側面からアセスメントする 3．対象の顕在・潜在する健康問題の解決・回避に向けた個別的な看護計画を立案・実践・評価する 4．対象への看護実践を通して看護に対する価値を見出す 5．保健医療福祉における看護の役割・機能を理解し反応する	生体機能の管理 ・生命の維持・改善への援助 ・心身の苦痛緩和 ・合併症の予防 ・日常生活面の援助 ・治療・処置・検査時の援助 ・家族への援助	病状不安定で生命の危険がある 全身管理が必要	消化器系 呼吸系 循環器系 泌尿器系 生殖器系 運動器系などで手術を受ける患者
回復期	◎疾病や外傷、手術などによって生命の危機的状態にある急性期から脱し、身体の治癒過程が回復に向かって進行している時期 【特徴】 ・合併症・二次障害の危険がある ・治療・看護への依存度が高い状態から、日常生活の自立に向けてセルフケアの度合いが増えていく過程である。	慢性期にある対象と家族を理解し、生涯にわたるセルフケア・セルフマネジメントを促す看護ができる能力を養う	1．対象の発達課題と特徴、取り巻く環境に基づいて対象を理解する 2．対象の顕在・潜在する健康問題を身体・精神・社会的側面からアセスメントする 3．対象の顕在・潜在する健康問題の解決・回避に向けた個別的な看護計画を立案・実践・評価する 4．対象への看護実践を通して看護に対する価値を見出す 5．保健医療福祉における看護の役割・機能を理解し反応する	日常生活の管理 ・日常生活拡大への援助 ・障害受容への援助 ・機能回復への援助 ・生活指導と社会生活適応に向けての援助 ・治療・処置・検査時の援助 ・家族への援助	術後回復過程にある患者 リハビリテーションをしている患者	消化器系 運動器系 循環器系疾患などの発病後や手術後など
慢性期	◎３ヶ月以上にわたり、一定の治療・ケアを必要とする病状の安定期 【特徴】 ・発症から経過が長期で、生活を疾病の治療に重点を置いて調節していかないと徐々に悪化する。 ・疾病のコントロール、生活面の自己管理をしながら生活をしていく必要がある。			セルフケア・セルフマネジメントの援助 ・障害受容のための援助 ・慢性的症状の緩和 ・セルフケア能力向上に向けた援助 ・セルフマネジメント能力向上に向けた援助 ・患者・家族の生活指導	日常生活援助を多く必要とする患者 生活指導の必要な患者	心筋梗塞 心不全 糖尿病 高血圧 慢性呼吸不全 腎不全 肝機能障害 など
終末期	◎疾病に対していかなる治療を行なっても死が避けられない状態で、現疾患の治療より、むしろ症状の緩和が優先される時期。 【特徴】 ・衰弱が激しく、身体的苦痛が強い ・自力による日常生活行動が困難 ・孤独・死への恐怖など精神的苦痛が大きい。	終末期にある患者および家族を理解し、その人らしく生が全とうできるように、身体的・心理的・社会的苦痛の緩和のための援助ができる能力を養う。	1．対象の発達課題と特徴、取り巻く環境に基づいて対象を理解する 2．対象の顕在・潜在する健康問題を身体・精神・社会的側面からアセスメントする 3．対象の顕在・潜在する健康問題の解決・回避に向けた個別的な看護計画を立案・実践・評価する 4．対象への看護実践を通して看護に対する価値を見出す 5．保健医療福祉における看護の役割・機能を理解し反応する	心身の苦痛緩和 日常生活の援助 ＱＯＬ向上への援助 家族との調整、精神的支援 安らかな死への援助	終末期にある患者	がんの終末期など

―器官・系統における機能障害への看護・治療・処置別看護―

資料 4

	受け持たせたい対象	学ばせたい援助	学ばせたい症状	学ばせたい処置・検査・治療など	受け持たせたい疾患	実習該当病棟
急性期	手術を受ける対象	1. 生命の維持、改善への援助 2. 心身の苦痛の緩和 3. 合併症予防の援助 4. 日常生活面の援助 5. 治療・処置・検査時の援助 6. 対象・家族への援助	発熱、腹痛（創痛）食欲不振 嘔気・嘔吐　腹部膨満 排泄障害（下痢・便秘） 術後排痰困難、術後疼痛 術後合併症の徴候・症状 胸痛　呼吸困難　不整脈　意識障害　頚部硬直　運動機能障害	手術療法　酸素療法　薬物療法　食事療法　CV:中心静脈カテーテル ECG　呼吸機能検査　血液ガス分析　２４ｈクレアチニン・クリアランス 胃透視　GTF（上部消化管内視鏡）CF（大腸ﾌｧｲﾊﾞｰ）　DSA（血管造影） BF（気管支ファイバー）　心臓カテーテル検査 ドレーン・チューブ類の管理　モニター監視　スワンガンツカテーテル管理　CVP 測定　術後の脳室・脳槽ドレナージ・スパイナルドレナージ管理 人工呼吸器の管理　ネブライザー　一時吸引　術後疼痛管理（硬膜外麻酔）　胸腔ドレーンの管理　低圧持続吸引　二次・三次救命処置	消化器系がん（胃がん　胆嚢がん　大腸がん　直腸がん　肝臓がん　膵臓がん） 肺がん　膀胱がん　腎臓がん等 心筋梗塞　動脈解離 腹部大動脈瘤 脳出血　脳梗塞	９Ｂ外科 ７Ｂ呼吸器科 ９Ａ泌尿器科 手術室 救命救急ｾﾝﾀｰ ４C(ﾘｳﾏﾁｾﾝﾀｰ)
回復・慢性期	日常生活自立に向けての援助を必要とする対象	1. 病状悪化及び合併症予防のための援助 2. 日常生活拡大への援助 3. 障害受容への援助 4. 機能回復への援助 5. セルフケア能力向上に向けた援助 ・日常生活を維持向上する為の指導 6. 生活指導と社会生活適応に向けての援助 ・対象・家族への生活指導 ・社会資源活用への援助 ・在宅療養に向けての援助 7. 治療、処置、検査時の援助	呼吸困難　胸水　咳嗽　喀痰 血痰　喘鳴　チアノーゼ	化学療法　放射線療法　薬物療法　酸素療法　胸部 X―P　CT　血液ガス分析　ECG 監視　心エコー　BF（気管支ファイバー）肺理学療法（体位ドレナージ・スクイージング）ネブライザー　一時吸引　低圧持続吸引 NIPPV（非侵襲的陽圧換気法）在宅酸素療法　日常生活指導	自然気胸　肺がん 肺炎　気管支喘息 肺気腫　慢性呼吸不全 慢性閉塞性肺疾患	７Ｂ呼吸器科
	回復過程にある対象		排尿障害（頻尿・血尿など）	手術療法　膀胱留置カテーテル　IP（腎盂造影）尿検査（検尿・蓄尿）　膀胱鏡	前立腺がん　前立腺肥大 腎腫瘍　膀胱がん	９Ａ泌尿器科
	機能障害のある対象		乳房の変化（しこり、くぼみ、変形） 月経異常　帯下　不正出血	手術療法　薬物療法（ホルモン療法）　化学療法　マンモグラフィー　CT エコー　乳房切除後機能訓練	乳がん　子宮がん　卵巣がん　子宮筋腫	６Ｂ婦人科
	リハビリテーションをしている対象		呼吸困難　胸痛　動悸 チアノーゼ　不整脈　浮腫 心不全症状	薬物療法　食事療法　血管造影（心臓カテーテル法）PCI（冠動脈インターベンション）　心臓リハビリテーション　心エコー　トレッドミル運動試験　心筋シンチ　ペースメーカー治療　RFA(ラジオ波焼灼療法)　日常生活指導	心筋梗塞　狭心症　心不全　動脈解離　房室ブロック　弁膜症	４Ａ循環器科
	慢性疾患をもち生活指導の必要な対象		出血傾向　貧血　易感染状態	薬物療法　化学療法（抗癌剤投与）　輸血療法　骨髄穿刺　髄注 感染予防（手洗　ガウンテクニック　空気清浄器等）日常生活指導	白血病　悪性リンパ腫 骨髄腫	７Ｂ内科
			関節運動の異常　麻痺　拘縮 知覚障害　腰痛・関節痛	牽引療法　理学療法　CPM　日常生活指導	変形性股（膝）関節症 椎間板ヘルニア	８Ａ整形外科 ３C4C(ﾘｳﾏﾁｾﾝﾀｰ)
			肝不全　黄疸　下血　吐血 腹水　腹部膨満　昏睡 皮膚掻痒感　出血傾向	安静療法　薬物療法　食事療法　ERCP（逆行性膵胆管造影）ENBD（内視鏡的経鼻胆管ドレナージ）EST（内視鏡的十二指腸括約筋切開術） ESWL(対外衝撃波結石破砕術)PTCD（経皮経肝胆嚢ドレナージ）EVL（内視鏡的食道静脈瘤結さつ術）RFA(ラジオ波焼灼療法)エコー下肝生検　肝ドレナージ　EIS（内視鏡的硬化療法）GTF　CF　EMR（内視鏡的粘膜切除術）イレウスチューブ管理　腹水穿刺　日常生活指導	肝硬変　胆石　胆嚢炎 膵炎 食道静脈瘤	７Ａ内科
			腹痛　嘔気　嘔吐　腹部膨満 排泄障害（下痢・便秘）	手術療法　食事療法　術後合併症予防のケア　ネブライザー　食事指導など日常生活指導　ストーマケア	食道がん　胃がん　大腸がん　直腸がん	９Ｂ外科
			運動障害　知覚障害 言語障害　嚥下障害 半側空間無視　失見当識障害 意識障害　頚部硬直	薬物療法　経管栄養　理学療法　作業療法　言語療法　神経学的検査 脳 CT　MRI　脳血流シンチ　脳血管造影　腰椎穿刺　意識レベル観察術 後の脳室ドレナージ・脳槽ドレナージ・スパイナルドレナージ管理 嚥下訓練　ADL 拡大のケア　日常生活指導	脳梗塞　脳出血 クモ膜下出血 正常圧水頭症 脳腫瘍　パーキンソン病	８Ｂ脳神経外科 神経内科 ３C(ﾘｳﾏﾁｾﾝﾀｰ)
			高血糖症状　多尿　口渇 低血糖症状 乏尿　蛋白尿　血圧上昇 浮腫	食事療法　運動療法　薬物療法　自己注射・自己血糖測定指導 血糖測定　血液検査（空腹時血糖　一日血糖）　GFR　シャント術（手術療法）血液透析療法　腹膜還流（CAPD）　日常生活指導	糖尿病　腎不全	７Ａ内科 4C(ﾘｳﾏﾁｾﾝﾀｰ)
終末期	予後不良の対象	1. 心身の苦痛の緩和 2. 日常生活の援助 3. ＱＯＬ向上への援助 4. 家族との調整・精神的支援 5. 安らかな死への援助	疼痛　全身倦怠感　全身衰弱 腹水　腹部膨満　黄疸	薬物療法　疼痛コントロール（麻薬の取り扱い）　酸素療法　対症療法 腹水穿刺　家族への支援　緩和ケア	消化器系がん（肝・膵臓・胃、大腸など）	７Ａ内科 ９Ｂ外科
			呼吸困難　咳嗽　喀痰　胸痛 血痰　胸水　全身衰弱	薬物療法　疼痛コントロール（麻薬の取り扱い）　酸素療法　対症療法 胸腔穿刺 家族への支援　緩和ケア	肺がん　間質性肺炎	７Ｂ内科

老年看護学実習

Ⅰ　実習目的

老年期にある対象を総合的に理解し、あらゆる健康課題に応じた科学的根拠に基づいた看護を実践できる基礎的能力を養う

Ⅱ　実習構成

４単位（総時間数　１８０時間）

老年看護学実習Ⅰ　２単位（９０時間）

老年看護学実習Ⅱ　２単位（９０時間）

（介護老人福祉施設含む）

老年看護学実習 ── 老年看護学実習Ⅰ　２年次
　　└── 老年看護学実習Ⅱ　３年次

Ⅲ　実習内容・実習施設

実習名	実習内容	実習施設
老年看護学実習Ⅰ	病院に入院している高齢者の理解と看護	新発田病院 リウマチセンター
老年看護学実習Ⅱ	病院に入院している高齢者の理解と看護 介護老人福祉施設を利用する高齢者の理解と看護	新発田病院 介護老人福祉施設

Ⅳ　実習方法

老年看護学実習Ⅰ

＜病院＞

１．老年期（75 歳以上）にある患者を受け持ち実習する

２．看護過程の展開、看護の実践、評価

老年看護学実習Ⅱ

＜病院＞

１．老年期（75 歳以上）にある患者を受け持ち実習する

２．看護過程の展開、看護の実践、評価を行う

＜介護老人福祉施設＞　（実習期間中の２日間）

１．看護師、介護士の指導に従い、実習を行う

２．日常生活介護（食事・入浴・排泄・活動等）の見学・援助を通して学ぶ

３．入所者とのコミュニケーションを通して学ぶ

４．実習終了日に反省会を行い各自の学びについて意見交換する

Ⅴ　実習記録

老年看護学実習Ⅰ

1　老年看護学実習Ⅰ　評価表
2　老年看護学実習Ⅰ　学びのレポート
3　受け持ち患者記録
①情報Ⅰ【入院までのくらし】・・・・・・・・・・様式１
②情報Ⅱ【疾患・症状・状態】・・・・・・・・・様式２
③情報Ⅲ【生活機能への影響】・・・・・・・・・様式３
④全体像【病態・生活機能関連図】・・・・・・様式４
⑤アセスメント・・・・・・・・・・・・・・・・様式５
⑥看護計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・様式６
⑦看護計画の評価・・・・・・・・・・・・・・・様式７
⑧毎日の実習記録・・・・・・・・・・・・・・・様式８
4　事前学習・追加学習

老年看護学実習Ⅱ

＜病院＞

1　老年看護学実習Ⅱ　評価表
2　老年看護学実習Ⅱ　学びのレポート
3　受け持ち患者記録
①情報Ⅰ【入院までのくらし】・・・・・・・・・・様式１
②情報Ⅱ【疾患・症状・状態】・・・・・・・・・様式２
③情報Ⅲ【生活機能への影響】・・・・・・・・・様式３
④全体像【病態・生活機能関連図】・・・・・・様式４
⑤アセスメント・・・・・・・・・・・・・・・・様式５
⑥看護計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・様式６
⑦看護計画の評価・・・・・・・・・・・・・・・様式７
⑧毎日の実習記録・・・・・・・・・・・・・・・様式８
4　事前学習・追加学習

＜介護老人福祉施設＞

1　介護老人福祉施設　学びのレポート
2　事前学習・追加学習

Ⅵ　実習評価

実習評価表に基づき、出席状況、実習内容、態度、実習記録により、総合して評価する

老年看護学実習　Ⅰ

実習目標

1.老年期にある対象の発達段階や特徴を、対象を取り巻く環境に基づいて理解する
2.老年期にある対象の価値観、信念、生活のペースを理解し円滑な人間関係を築ける
3.老年期にある対象の看護問題に合わせた個別的な看護計画を立案、実践、評価する
4.老年期にある対象の看護実践を通して看護に対する価値を見出す

実習目標	行動目標	実習内容
1　老年期にある対象の発達段階や特徴を、対象を取り巻く環境に基づいて理解する	1）老年期にある対象の身体的、精神・心理的、社会的特徴を既習の知識を活かして情報収集できる	（1）対象の３側面の特徴を理解する ＜身体的側面の特徴＞ ①形態的加齢変化：骨関節系筋系、歯牙、衣服の状態、頭髪、皮膚、感覚器の変化など ②機能的加齢変化：呼吸・循環機能、排泄機能、消化機能、姿勢と運動機能、体温調節など ＜精神・心理的側面の特徴＞ ③認知機能の変化：知力、記憶力、総合判断力の状態 ④感情・人格の変化：不安、孤独感、依存心、自立心など ＜社会的側面の特徴＞ ⑤対象の生きてきた時代背景 生活史、職業経験、社会経験、生活環境、生活スタイルなど ⑥役割変化（職業・地域・家族）と生きがいへの影響
	2）老年期にある対象の発達段階と身体的、精神・心理的、社会的特徴から今までの生活状況（暮らし）が説明できる	（1）対象の発達段階を理解する ①発達課題（エリクソン、ペック、ハービガスト）から対象の生活状況を捉える ②その人らしさ（個別性）を理解する
	3）老年期にある対象が自己の健康状態やその変化を、どのように捉えているか対象の反応から説明できる	（1）対象が認識している健康状態を理解する ①病気や治療の理解と受け止め方 ②治療や指示に対する実行状況
	4）老年期にある対象に生じている病態を症状、検査データから解剖生理を踏まえて説明できる	（1）対象の病態の特徴を理解する ①慢性疾患（既往症）が多い ②合併症が発症しやすい ③重症化しやすく治りにくい ④発症・症状が非定形的である ⑤急変しやすい

実習目標	行動目標	実習内容
	5）老年期にある対象に行われる疾患・既往症に伴う治療・処置の目的、概要を説明できる	（1）対象の治療、処置を理解する ①薬物療法、手術療法、リハビリ療法など
2　老年期にある対象の価値観、信念、生活のペースを理解し円滑な人間関係を築ける	1）老年期にある対象の人格を尊重した態度で接することができる	（1）人格を尊重した態度を学ぶ ①対象の価値観、信念を理解する ②対象の尊厳を尊重した態度で接する
	2）老年期にある対象の特徴に応じたコミュニケーションができる	（1）コミュニケーションの特徴を理解し適切な手段を用いる ①難聴、視覚障害、言語障害、理解力低下のあるコミュニケーション ②言語的・非言語的コミュニケーション ③開かれた質問・閉ざされた質問
	3）老年期にある対象の援助の実践を通して円滑な人間関係を築くことができる	（1）円滑な人間関係を築く ①対象の生活のペースを考慮する ②対象のニーズに応じた援助 ③対象の意思決定を尊重する ④対象の安全・安楽に配慮した援助
3　老年期にある対象の看護問題に合わせた個別的な看護計画を立案、実践、評価する	1）老年期にある対象の加齢現象と健康障害による生活機能の変化を入院前と入院後で情報収集できる	（1）入院前後の生活機能の変化を情報収集する ①長年の生活習慣、元気な頃の生活状況、入院前の生活状況はどうか ②現在は何ができていて何ができていないのか
	2）老年期にある対象の加齢現象と健康障害が生活機能にどのように影響しているかをアセスメントできる	（1）得た情報からアセスメントをする ①得た情報の整理や統合をおこなう ②情報の意味や成り行きなどを解釈する ③他の情報との関連性を分析する ④今起こっていることの原因を考える
	3）老年期にある対象の生活機能のアセスメントから対象に必要な援助を考えられる	（1）援助の必要性を考える ①現在の状況からの改善・予防の余地はないのか ②その為には、どのような援助が必要か ③これまでの経過から今後どこまで到達可能か

実習目標	行動目標	実習内容
	4）老年期にある対象の健康課題とそれに関連する因子について病態・生活機能関連図を用いて系統的に解説できる	（1）情報Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを関連させて系統的に解説する ①〈入院までの暮らし〉情報Ⅰ ②〈疾患・症状・状態〉情報Ⅱ ③〈生活への影響〉情報Ⅲ ④〈健康課題と優先度〉 ⑤〈成り行き〉予測される危険性
	5）老年期にある対象の生活機能への影響を踏まえ健康課題の優先度を決定できる	（1）健康課題の優先度を決定する ①生命への危険性が高い ②対象者の苦痛・ニードが強い ③生活に及ぼす影響が強い ④健康に及ぼす影響が強い
	6）老年期にある対象のもてる力を活かした看護問題を特定し看護の方向性を示すことができる	（1）健康課題から対象者のもてる力を活かした看護問題を特定する ①健康課題がどのような背景で起きているのか ②何がその人らしく生活することを妨げているのか ③その人らしく生活するには何が不足しているのか ④そのままの状態だと、どうなってしまうのか ⑤その人のもてる力、強みを活かした援助は何か （2）看護の方向性を示す ①健康課題を改善・予防するにはどのような援助が必要か ②看護でできることは、どのような援助か
	7）老年期にある対象の生活機能の改善・予防、もてる力を活かした実現可能な目標を設定できる	（1）ＲＵＭＢＡの原則を活かした実現可能な目標を設定する ①どんな場合でも現実的であること ②誰でも理解できること ③測定できること ④具体的な行動を書き表すこと ⑤到達が可能であること
	8）老年期にある対象の個別性を重視した看護計画を立案できる	（1）目標が達成できるような具体的な計画を立てる ①ＯＰ，ＴＰ，ＥＰで計画する ②誰が見てもわかるように記述する ③対象者の価値信念を重視した安全・安楽な計画にする

実習目標	行動目標	実習内容
	9）老年期にある対象の状況に合わせた安全・安楽な援助の方法の選択や実施ができる	（1）対象者の生活リズムに合わせた援助を行う （2）対象者の安全・安楽な援助方法で実践する（他者の協力、中止ができる）
	10）老年期にある対象の自立を促す援助の実施ができる	（1）自立を促す援助を行う ①対象の意思決定する力を促す ②対象の最大限の生活機能の回復を目指す ③対象のもてる力を引き出す環境を整える
	11）看護問題の特定や目標、計画、実施から看護過程の評価（修正・追加）ができる	（1）看護過程の評価（修正・追加）をする ①計画を実施してみての対象者の反応や状態はどのように変化したのかを毎日の記録で評価し修正、追加する ②援助した結果から目標の到達度を判定する ③目標の到達度から達成、達成しなかった誘因・原因を看護過程のすべての段階で振り返る
4　老年期にある対象への看護実践を通して看護に対する価値を見出す	1）具体的な看護場面から老年期にある対象の看護について自分の考えを示すことができる	（1）老年期のある対象の看護を見出す ①老年期にある対象の看護実践から療養生活での看護を学ぶ
	2）老年期にある対象の生活機能改善に向けた看護について文献を通して認めることができる	（1）実習での学びを文献から承認する ①老年看護実習での実践から得た学びを文献と照らし合せて深めることができる
	3）老年期にある対象への総合的アプローチのための他職者との連携と協働の重要性が理解できる	（1）チーム医療の重要性を理解する （2）院内・院外との連絡調整の必要性を理解する
	4）老年期にある対象への看護実践に必要な知識、技術を修得するための機会を求めることができる	（1）知識、技術修得のための積極的な行動をする
	5）記録や課題の提出期日を守り、学習の自己管理ができる	（1）提出物の期日を守る （2）守れない場合でもその理由を報告する
	6）対象への影響や不利益を考慮し看護者としての自覚と自己の健康管理ができる	（1）自身の心身の健康管理をする ①対象への不利益を考え看護者としての責任感を持つ

老年看護学実習 Ⅱ

実習目標

1.老年期にある対象の発達段階や特徴を、対象を取り巻く環境に基づいて理解する
2.老年期にある対象の価値観、信念、生活のペースを理解し円滑な人間関係を築ける
3.老年期にある対象の看護問題に合わせた個別的な看護計画を立案、実践、評価する
4.高齢社会における保健医療福祉における看護の役割と機能を理解する
5.老年期にある対象の看護実践を通して看護に対する価値を見出す

実習目標	行動目標	実習内容
1　老年期にある対象の発達段階や特徴を、対象を取り巻く環境に基づいて理解する	1）老年期にある対象の身体的、精神・心理的、社会的特徴を既習の知識を活かして情報収集できる	（1）対象の３側面の特徴を理解する ＜身体的側面の特徴＞ ①形態的加齢変化：骨関節系 筋系、歯牙、衣服の状態、頭髪、皮膚、感覚器の変化など ②機能的加齢変化：呼吸・循環 機能、排泄機能、消化機能、姿勢と運動機能、体温調節など ＜精神・心理的側面の特徴＞ ③認知機能の変化：知力、記憶力、総合判断力の状態 ④感情・人格の変化：不安、孤独感、依存心、自立心など ＜社会的側面の特徴＞ ⑤対象の生きてきた時代背景 生活史、職業経験、社会経験、 生活環境、生活スタイルなど ⑥役割変化（職業・地域・家族）と生きがいへの影響
	2）老年期にある対象の発達段階と身体的、精神・心理的、社会的特徴から今までの生活状況（暮らし）が説明できる	（1）対象の発達段階を理解する ①発達課題（エリクソン、ペック、ハービガスト）から対象の生活状況を捉える ②その人らしさ（個別性）を理解する
	3）老年期にある対象が自己の健康状態やその変化を、どのように捉えているか対象の反応から説明できる	（1）対象が認識している健康状態を理解する ①病気や治療の理解と受け止め方 ②治療や指示に対する実行状況
	4）老年期にある対象に生じている病態を症状、検査データから解剖生理を踏まえて説明できる	（1）対象の病態の特徴を理解する ①慢性疾患（既往症）が多い ②合併症が発症しやすい ③重症化しやすく治りにくい ④発症・症状が非定形的である ⑤急変しやすい

実習目標	行動目標	実習内容
	5）老年期にある対象に行われる疾患・既往症に伴う治療・処置の目的、概要を説明できる	（1）対象の治療、処置を理解する ①薬物療法、手術療法、リハビリ療法など
2　老年期にある対象の価値観、信念、生活のペースを理解し円滑な人間関係を築ける	1）老年期にある対象の人格を尊重した態度で接することができる	（1）人格を尊重した態度を学ぶ ①対象の価値観、信念を理解する ②対象の尊厳を尊重した態度で接する
	2）老年期にある対象の特徴に応じたコミュニケーションができる	（1）コミュニケーションの特徴を理解し適切な手段を用いる ①難聴、視覚障害、言語障害、理解力低下のある対象のコミュニケーション ②言語的・非言語的コミュニケーション ③開かれた質問・閉ざされた質問
	3）老年期にある対象の援助の実践を通して円滑な人間関係を築くことができる	（1）円滑な人間関係を築く ①生活のペースを考慮する ②対象のニーズに応じた援助 ③意思決定を尊重する ④対象の安全・安楽に配慮した援助
3　老年期にある対象の看護問題に合わせた個別的な看護計画を立案、実践、評価する	1）老年期にある対象の加齢現象と健康障害による生活機能の変化を入院前と入院後で情報収集できる	（1）入院前後の生活機能の変化を情報収集する ①長年の生活習慣、元気な頃の生活状況、入院前の生活状況はどうか ②現在は何ができていて何ができていないのか
	2）老年期にある対象の加齢現象と健康障害が生活機能にどのように影響しているかをアセスメントできる	（1）得た情報からアセスメントをする ①得た情報の整理や統合をおこなう ②情報の意味や成り行きなどを解釈する ③他の情報との関連性を分析する ④今起こっていることの原因を考える
	3）老年期にある対象の生活機能のアセスメントから対象に必要な援助を考えられる	（1）援助の必要性を考える ①現在の状況からの改善・予防の余地はないのか ②その為には、どのような援助が必要か ③これまでの経過から今後どこまで到達可能か

実習目標	行動目標	実習内容
	4）老年期にある対象の健康課題とそれに関連する因子について病態・生活機能関連図を用いて系統的に解説できる	（1）情報Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを関連させて系統的に解説する ①〈入院までの暮らし〉情報Ⅰ ②〈疾患・症状・状態〉情報Ⅱ ③〈生活への影響〉情報Ⅲ ④〈健康課題と優先度〉 ⑤〈成り行き〉予測される危険性
	5）老年期にある対象の生活機能への影響を踏まえ健康課題の優先度を決定できる	（1）健康課題の優先度を決定する ①生命への危険性が高い ②対象者の苦痛・ニードが強い ③生活に及ぼす影響が強い ④健康に及ぼす影響が強い
	6）老年期にある対象のもてる力を活かした看護問題を特定し看護の方向性を示すことができる	（1）健康課題から対象者のもてる力を活かした看護問題を特定する ①健康課題がどのような背景で起きているのか ②何がその人らしく生活することを妨げているのか ③その人らしく生活するには何が不足しているのか ④そのままの状態だと、どうなってしまうのか ⑤その人のもてる力、強みを活かした援助は何か （2）看護の方向性を示す ①健康課題を改善・予防するにはどのような援助が必要か ②看護でできることは、どのような援助か
	7）老年期にある対象の生活機能の改善・予防、もてる力を活かした実現可能な目標を設定できる	（1）ＲＵＭＢＡの原則を活かした実現可能な目標を設定する ①どんな場合でも現実的であること ②誰でも理解できること ③測定できること ④具体的な行動を書き表すこと ⑤到達が可能であること
	8）老年期にある対象の個別性を重視した看護計画を立案できる	（1）目標が達成できるような具体的な計画を立てる ①ＯＰ，ＴＰ，ＥＰで計画する ②誰が見てもわかるように記述する ③対象者の価値信念を重視した安全・安楽な計画にする

実習目標	行動目標	実習内容
	9）老年期にある対象の状況に合わせた安全・安楽な援助の方法の選択や実施ができる	（1）対象者の生活リズムに合わせた援助を行う （2）対象者の安全・安楽な援助方法で実践する（他者の協力、中止ができる）
	10）老年期にある対象の自立を促す援助の実施ができる	（1）自立を促す援助を行う ①対象の意思決定する力を促す ②対象の最大限の生活機能の回復を目指す ③対象のもてる力を引き出す環境を整える
	11）看護問題の特定や目標、計画、実施から看護過程の評価（修正・追加）ができる	（1）看護過程の評価（修正・追加）をする ①計画を実施してみての対象者の反応や状態はどのように変化したのかを毎日の記録で評価し修正、追加する ②援助した結果から目標の到達度を判定する ③目標の到達度から達成、達成しなかった誘因・原因を看護過程のすべての段階で振り返る
4　高齢社会における保健医療福祉における看護の役割と機能を理解する	1）特別養護老人ホームに関係する法律と施設の特徴を理解できる	（1）特別養護老人ホームに関する法律についてわかる （2）特別養護老人ホームの特徴についてわかる
	2）高齢者の療養生活の場での環境づくりの為の看護の役割と機能を理解できる	（1）施設の健康管理がわかる ①健康状態のアセスメント ②感染予防と管理 （2）施設の医療処置がわかる ①点滴や服薬管理 ②胃瘻や経管栄養の管理 ③褥瘡の処置 （3）施設の緊急時の対応がわかる ①処置の優先順位の判断 ②介護職・医師との連携 （4）施設の看取りがわかる ①高齢者・家族の意思の確認 ②医師、介護職との連携 （5）認知症のケアがわかる ①認知症高齢者の理解 ②BPSD の対応

実習目標	行動目標	実習内容
5　老年期にある対象の看護実践を通して看護に対する価値を見出す	1）具体的な看護実践場面から老年期にある対象の看護について自分の考えを示し、文献を通して認めることができる	（1）老年期のある対象の看護を見出す ①老年期にある対象の看護実践から療養生活での看護を学ぶ （2）実習での学びを文献から承認する ①老年看護実習での実践から得た学びを文献と照らし合せて深めることができる
	2）老年期にある対象の看護実践に必要な知識・技術を修得する為の機会を求めることができる	（1）老年看護に必要な知識・技術を積極的に学習する
	3）記録や課題の提出期日を守り学習の自己管理ができる	（1）提出物の期日を守る ①守れない場合はその理由を報告する
	4）対象への影響や不利益を考慮し看護者としての自覚と自己の健康管理ができる	（1）自身の心身の健康管理をする ①対象への不利益を考え看護者としての責任感を持つ

小児看護学実習

Ⅰ　実習目的

小児とその家族に必要な看護を実践する能力を養う

Ⅱ　実習目標

1　小児各期の特徴を理解し、健全な成長を促す為の援助ができる

2　健康障害を持つ小児と家族を理解し、発達段階、健康段階にあわせた看護実践ができる

3　小児看護に必要な基礎的な看護技術を学ぶ

Ⅲ　実習構成

２単位（総時間数　９０時間）

小児看護学実習
- 健康な小児の看護
- 健康障害を持つ小児の看護

実習内容	実習施設	実習時間
健康な小児の看護	・保育園	１６Ｈ
	・小学校（保健室）	８Ｈ
	・新発田病院（健康診査）	４Ｈ
健康障害を持つ小児の看護	・新発田病院（病棟・外来・ＮＩＣＵ）	６２Ｈ

Ⅳ　実習内容

≪保育園実習≫

健康な乳幼児の成長発達を理解し、保育の実際を学ぶ

実習目標	行動目標	実習内容
1　保育園の概要を理解する	1）乳幼児の成長をはぐくむ為に必要な保育環境を理解する	1）保育園の沿革、構造、設備 園児定数、クラス別人数 職員組織、職員人数 2）行事（年間・月間） 年齢別保育活動の実際 3）健康・安全管理対策 4）保育士の役割
2　年齢別の成長発達の特徴を理解する	1）乳幼児の成長発達について理解する	1）年齢別の成長発達の状況 （形態的成長・精神・運動機能の発達） 2）成長発達を促す遊び
3　乳幼児の基本的生活行動の自立状況と保育の実際を学ぶ	1）乳幼児の基本的生活行動の自立状況を理解する 2）年齢にあわせた援助のあり方を理解する	1）年齢別の基本的生活行動の自立状況 2）1日の保育スケジュールに沿った年齢別保育の実際
4　保育の実際を通して、乳幼児との接し方を学ぶ	1）乳幼児の言語発達の実際を理解する 2）発達段階における小児のコミュニケーション方法がわかる 3）発達に合わせたコミュニケーションができる	1）乳幼児のことば・しぐさ・表情・機嫌 2）言語発達の理解と接し方

≪小学校（保健室）実習≫

健康な学童の成長発達を理解し、学校保健の実際を学ぶ

実習目標	行動目標	実習内容
1　学童期の成長発達について理解する	1）学童期の成長発達状況を理解できる	1）年齢別の成長発達の状況 （形態・精神運動機能の発達）
2　学童期の健康問題について理解する	1）学童期の小児の健康問題がわかる	1）保健室利用の実態 2）児童の訴え 3）授業や休憩時間の状況
3　保健教育や学校保健活動の実際を学ぶ	1）学童期の小児の健康管理や健康教育活動を知る	1）定期健康診断、う歯への指導 2）健康増進への指導 3）保健室での養護教諭の関わり方

≪小児病棟実習・小児外来実習・ＮＩＣＵ実習≫

健康障害を持つ小児の看護に必要な基礎的看護実践能力を養う

実習目標	行動目標	実習内容
1　受持ち患児の状況を理解する	1）疾病経過・症状・検査・処置・治療を理解する 2）出生時および成長発達の状態を理解する 3）入院前後の生活状態を理解する 4）入院・病気に伴う苦痛と適応状態を理解する 5）患児の入院と病気に対する家族の理解と対処状況を理解する 6）小児の入院に伴う家族への影響を理解する	1）疾病経過、症状、検査、処置、治療など 2）出生時および成長発達の状態 3）小児伝染性疾患の罹患状況、予防接種 4）入院前後の基本的生活行動の状態 5）入院・病気に伴う身体的・精神的苦痛 6）入院・病気への適応状態 7）小児の入院と病気に対する両親の理解と対処状況、面会状況
2　患児・家族との関係を形成することができる	1）患児・家族とのかかわりにおいて非言語的コミュニケーションの方法がわかる 2）健康障害や発達段階にあわせたコミュニケーションができる 3）患児・家族の訴えや気持ちを配慮した関わりができる	1）言語的・非言語的コミュニケーション 2）健康障害や発達段階に応じた関わり方 3）家族との関わり方 4）プライバシーの保護
3　患児の日常生活の援助ができる	1）病棟の看護目標、看護計画を理解する 2）患児にとって必要な観察ポイントをあげ、観察できる 3）患児の健康障害のレベル・成長発達に合わせて健康回復への適切な援助ができる 4）受持ち患児の家族に対して適切な援助が実施できる	1）環境、食事、排泄、清潔、衣生活、移動および活動、遊び、学習の援助など 2）事故防止、感染予防 3）症状の観察 4）生活指導 5）診療の介助
4　安全・安楽を配慮した小児看護技術を学ぶ	1）小児の特性を理解した看護技術が実施できる 2）ケアを行う環境や対象の反応に留意できる	1）小児看護技術項目参照

5　小児病棟の特殊性を理解する	1）小児病棟の構造・設備について理解する 2）事故防止・感染防止ができる	1）構造、設備、物品、安全対策 2）病棟管理、看護方針 3）病床数、入院患児の特徴
6　小児外来の特徴と看護の実際を学ぶ	1）処置・治療・検査の実際を見学し、必要なケアについて考察する 2）専門外来にて通院治療を受けている小児・家族の疾病への取り組み方について知る 3）様々な健康段階にある対象に合わせた看護の役割を考察する	1）一般外来、慢性疾患外来、乳児健診、予防接種 2）受付時の対応、問診表 3）伝染性疾患への対応、事故防止 4）診察の介助 5）自己管理指導、家族への指導、育児相談
7　ＮＩＣＵの特徴と看護の実際を学ぶ	1）ＮＩＣＵの概要を理解する 2）ハイリスク児の看護の実際を知る 3）家族への援助について考察する	1）ＮＩＣＵの構造、設備、医療機器、安全対策、スタッフメンバー構成 2）体温管理、呼吸管理、循環管理、輸液管理、感染防止 3）保育器の取り扱いの実際 4）児の生活の援助（栄養、排泄、清潔、睡眠） 5）親子関係確立の援助 6）社会資源の活用

Ⅴ　実習方法

≪保育園実習≫

1．実習時間は９：００～１６：００とする。
2．各年齢別クラスをローテーションし、保育園の日課に沿って、実習を行う。
3．保育士と共に園児に関わり、保育の実際を学ぶ。

≪小学校（保健室）実習≫

1．実習時間は９：００～１５：３０とする。
2．自己の実習課題を明確にして、養護教諭の指導に従って実習を行う。

≪小児病棟実習・小児外来実習・ＮＩＣＵ実習≫

1．小児病棟実習
　1）原則として乳児もしくは幼児を受け持つ。
　2）入院一週間以内の小児（急性期）、長期入院の小児（慢性期）を受け持って実習する。
　3）オリエンテーションは、病棟実習開始初日に実施される。
2．小児外来実習・ＮＩＣＵ実習
　1）実習指導者の指導に従って実習を行う。
　2）オリエンテーションは、外来実習開始初日に実施される。

Ⅵ　実習記録

1．小児看護学実習評価表（様式１）
2．小児看護学実習での学び（様式は別に指定する）
3．小児病棟実習記録（受持ち患児記録）
　1）基礎情報（様式２）
　2）アセスメント（様式３）
　3）看護計画（様式４）
　4）実習記録（様式５）
　5）看護実践の評価（様式６）
4．小児外来実習記録（健康診査・外来）（様式７）
5．ＮＩＣＵ実習記録（様式８）
6．保育園実習記録
　1）保育園の概要（様式９）
　2）実習記録（様式１０）
　3）課題レポート　　テーマ「成長発達に応じた保育と安全」または「乳幼児期の遊びの意義」
　　（様式は別に指定する）
7．保健室実習記録
　1）課題レポート（様式は別に指定する）
8．看護技術経験録

Ⅶ　実習評価

実習評価表に基づき、出席状況・実習内容・態度・実習記録を総合して評価する。

母性看護学実習

Ⅰ　実習目的

妊娠・分娩・産褥期・新生児の特徴を理解し、母親と新生児およびその家族に適切な看護が実践できる能力を養う。

Ⅱ　実習目標

1　妊・産・褥婦および新生児の特徴を理解し、必要な看護が実践できる。
2　妊娠・分娩・産褥期における母子関係について理解を深めることができる。
3　母性を取り巻く保健・医療・福祉の諸機関との関係について理解できる。

Ⅲ　実習構成：90 時間（2 単位）

- 母性看護学実習
  - 妊婦の看護
  - 産婦の看護
  - 褥婦の看護
  - 新生児の看護

実習施設

実習内容	実習施設	実習時間
妊婦の看護	県立新発田病院（産科外来）	8H
産婦の看護	県立新発田病院（病棟）	82H
褥婦の看護		
新生児の看護		

Ⅳ　実習内容

1　妊婦の看護

実習目標	行動目標	実習内容
1　妊婦の生理的変化および心理・社会的変化が理解できる。	1）妊娠週数に伴う生理的変化とそれに伴う不快症状がわかる。 2）妊婦の心理・社会的変化がわかる。	1）妊娠週数に伴う生理的変化 ① 全身の変化 ② 子宮の変化 ③ 胎児の変化 ④ 乳房の変化 2）妊娠中に起こりやすい不快症状 つわり，静脈瘤，便秘，浮腫，頻尿，腰背部痛，下肢痙攣，痔など 3）妊婦の心理・社会的特徴 ① 妊娠の受容（妊娠に伴う身体的変化に対する気持ち） ② 日常生活の調整 ③ 生活・育児環境・顕在的背景 ④ 夫や家族の妊娠の受容
2　妊婦健康審査の意義および援助内容が理解できる。	1）妊婦健康審査の意義および目的が説明できる。 2）母子健康手帳の目的と活用について説明できる。 3）妊婦健康審査の計測・検査方法とその留意点がわかる。 4）計測・検査結果から経過を把握することができる。	1）妊婦健康審査 ① 診察の準備 ② 診察を受ける妊婦の準備 ③ 妊娠反応 ④ 体重測定 ⑤ 血圧測定 ⑥ テステープによる尿検査 ⑦ 浮腫の有無 ⑧ 子宮底長の測定 ⑨ 腹囲測定 ⑩ 児心音測定 ⑪ レオポルド４段診断法 ⑫ 超音波断層撮影 ⑬ NST ⑭ 血液検査 ⑮ 内診 ⑯ 胎盤機能検査 2）母子健康手帳の目的と活用の方法
3　妊婦に応じた保健指導が理解できる。	1）保健指導の必要性が説明できる。 2）保健指導の目的が説明できる。 3）妊娠各期の保健指導の内容がわかる。 4）個別指導と集団指導の特徴がわかる。	1）保健指導 ① つわり ② 切迫流・早産 ③ 妊娠中毒症 ④ 貧血 ⑤ 母体保護に関する法律　など 2）個別指導と集団指導 ① 妊娠各期の指導 ② 母親学級

2　産婦の看護

実習目標	行動目標	実習内容
1　産婦の生理的変化および心理・社会的変化が理解できる。	1）産婦の生理的変化がわかる。 2）産婦の心理・社会的変化がわかる。	1）分娩各期に伴う生理的変化 ① 分娩開始 ② 分娩第１期 ③ 分娩第２期 ④ 分娩第３期 ⑤ 分娩第４期 2）産婦の心理・社会的特徴 ① 分娩徴候開始から入院まで ② 入院時の産婦と家族の心理 ③ 分娩進行に伴う心理・社会的変化
2．産婦の看護を通して、分娩経過や分娩各期に必要な援助が理解できる。	1）分娩前の情報から、分娩期の母子に影響を与える可能性のある情報を収集できる。 2）分娩各期の観察および援助ができる。	1）分娩前の情報 ① 非妊時の健康状態 ② 既往妊娠・分娩 ③ 今回の妊娠・分娩経過 ④ 胎児の状態 2）分娩第１期の看護 ① 子宮底長・腹囲の測定，レオポルド４段診断法による腹部の観察 ② 分娩進行状態の把握 陣痛間歇・発作時間，内診結果 ③ 児心音の聴取 ④ 分娩進行に伴う観察 血性分泌物，破水，努責感 ⑤ 産痛の緩和 呼吸法，補助動作，マッサージ ⑥ 分娩経過に応じた日常生活援助 食事，排泄，清潔，動静，環境 3）分娩第２期の看護 ① 分娩進行状態の把握 陣痛間歇・発作時間，内診結果 ② 児心音の聴取 ③ 分娩進行に伴う観察 破水，努責，排臨・発露 ④ 呼吸法と努責法 ⑤ 励ましの声かけ ⑥ 分娩経過に応じた日常生活援助 食事，排泄，清潔，動静，環境 ⑦ 胎児娩出時刻，分娩様式の確認 4）分娩第３期の看護 ① 胎盤剥離徴候の観察 ② 胎盤娩出時刻・娩出様式の確認 ③ 子宮収縮状態と出血状態の確認 ④ 子宮収縮促進の援助 冷罨法，輪状マッサージなど

実習目標	行動目標	実習内容
		⑤ 産婦の一般状態の観察 バイタルサイン，表情，疲労・創痛・後陣痛の有無など ⑥ 分娩経過に応じた日常生活援助 食事，排泄，清潔，動静，環境 ⑦ 胎盤の観察と計測 6）分娩第４期の看護 ① 産婦の一般状態の観察 バイタルサイン，子宮底長と収縮状態，悪露，排尿状態など ② 褥室への移動
3　出産の喜びを産婦および家族と分かち合うことができる。	1）産婦にねぎらいの声をかけられ、出産を共に喜ぶことができる。	1）母子関係を円滑にする援助 ① 母子対面 ② 家族と児の対面 ③ 早期授乳 ④ 母親および家族へのねぎらいの声かけ
4　帝王切開を受ける産婦の身体的変化および心理・社会的変化が理解できる。	1）産婦の帝王切開に伴う不安の緩和とその必要性がわかる。 2）帝王切開中・後の母子の安全面への配慮とその必要性がわかる。 3）産婦にねぎらいの声をかけられ、出産を共に喜ぶことができる。	1）帝王切開前の産婦の不安の把握および軽減するための援助 2）産婦および新生児の急変時の対策についての見学 3）生命誕生に対しての産婦へのねぎらいの言葉がけや接し方、母子の対面・早期接触の見学 4）産婦の帰室時の申し送りの見学

3　褥婦の看護

実習目標	行動目標	実習内容
1　褥婦の生理的変化および心理・社会的変化が理解できる。	1）褥婦の生理的変化がわかる。	1）復古状態 ① 子宮の退縮 ② 悪露の性状・量・色 ③ 会陰部の状態 2）復古現象を促進させるための援助 ① 早期離床 ② 排泄指導 ③ 外陰部の清潔 ④ 悪露交換 ⑤ 子宮底の輪状マッサージ，冷罨法 ⑥ 産褥体操 ⑦ 直接授乳 3）乳房の変化 ① 乳房・乳頭・乳輪の状態 ② 乳管開通の有無と程度 4）乳汁分泌を促進させるための援助 ① 母乳栄養の利点 ② 乳汁分泌のメカニズム ③ 授乳指導（早期授乳開始） ④ 乳房マッサージ（SMC 方式） ⑤ 搾乳方法の指導 ⑥ 乳房トラブルに対する援助 ⑦ 栄養・水分，睡眠・休息，精神面に関する指導
	2）褥婦の心理・社会的特徴がわかる。	1）褥婦の心理・社会的特徴 ① 母親役割取得状況 育児に関する知識・技術の習得，母子相互作用，育児不安 ② マタニティブルー ③ 家族関係の成立 夫や家族のサポート・役割変化
	3）母子関係確立のための援助ができる。	1）母子関係確立のための援助 ① 妊娠・分娩の受け止め方 ② 分娩後早期の母子対面 ③ 育児指導 抱き方，おむつ交換，授乳指導，調乳指導，沐浴指導
2　褥婦に対する退院指導が理解できる。	1）褥婦と新生児の退院後の生活が予測できる。	1）退院指導 ① 褥婦の身体の変化と生活指導 ② 新生児の生理と観察方法 ③ 家族計画 ④ １か月健診の必要性 ⑤ 社会資源の活用

4　新生児の看護

実習目標	行動目標	実習内容
1　新生児の生理的特徴および必要な看護について理解できる	1）出生直後の児の健康状態に影響を与える因子について説明できる。	1）出生直後の児の健康状態に影響を与える情報の把握 ① 胎児の成長・発達に影響を及ぼす因子の有無 ② 妊娠中の異常 ③ 分娩経過の異常（胎児仮死徴候）
	2）出生直後の新生児の観察と援助がわかる。	1）出生直後の新生児の看護 ① 気道の確保 ② アプガースコアの採点 ③ 母児標識装着 ④ 点眼 ⑤ 低体温予防 ⑥ 身体各部の計測 ⑦ 成熟度，奇形の有無，分娩の影響 ⑧ 沐浴 ⑨ 臍処置 ⑩ 母子対面
	3）胎外生活に適応するための生理的変化がわかる。	1）新生児の生理的変化 ① 呼吸の確立 ② 循環 ③ 体温 ④ 腎機能 ⑤ 消化器 ⑥ 生理的黄疸 ⑦ 感染防御力 ⑧ 皮膚の変化 ⑨ 原始反射
	4）新生児看護の原則に沿った援助ができる。	1）新生児看護の原則と援助 ① 呼吸の確保 ② 保温 ③ 感染予防 ④ 事故防止 ⑤ 栄養 ⑥ 異常の早期発見
	5）新生児に行われる診察・検査・処置がわかる。	1）新生児の診察・検査・処置 ① 出生直後の診察 ② 先天性代謝異常（ガスリー法） ③ 黄疸の検査 ミノルタ，血清総ビリルビン値 ④ ビタミンＫ２シロップの投与 ⑤ 退院診察

Ⅴ　実習方法

1　妊婦の看護

1）健診に来院した妊婦を受け持ち妊婦の健診の流れに沿って、指導のもとに見学および援助を実施する。

2）外来における保健指導の実際を見学する。（安産教室への参加）

2　産婦の看護

1）分娩は原則として１例は見学する。（帝王切開も含む）

2）分娩第１期から産褥まで（または帝王切開患者の術前～術後）を受け持ち援助を行う。

3　褥婦の看護

1）受け持ち後、速やかに担当助産師と受け持ち褥婦の問題点、看護の方向性を確認し、早急にチームカンファレンスにかける。（日程を指導者と打ち合わせる。）

2）チームカンファレンス後は助産師の指導のもと実践する。

4　新生児の看護

1）新生児と母親を一体で観察し看護を行う。

2）新生児の観察や援助は助産師または看護師の指導のもと、見学および実施する。

Ⅵ．実習記録

1．母性看護学実習評価表（様式１）

2・母性看護学実習の学び（様式２）

3．産科外来実習

1）妊婦の看護実践記録用紙（様式３）

4．受け持ち患者記録用紙

1）母性基礎情報用紙（様式４）

2）褥婦・新生児経過表（様式５）

3）母親・新生児のアセスメント用紙（様式６）

4）看護計画用紙（様式７）

5）看護実践の評用紙（様式８）

6）母性看護学　看護実践記録（様式９）

5．見学実習記録用紙（様式 10）

6．事前・追加学習及び課題

Ⅶ．実習評価

実習評価表に基づき、出席状況・実習内容・態度・学習記録により総合して評価する。

精神看護学実習

Ⅰ　実習目的

精神に障害のある対象とその家族を理解し、適切な看護を実践する能力を養う

Ⅱ　実習目標

1　精神に障害のある患者とその行動を観察し、行動の意味を判断し理解する
2　入院患者の治療的環境を理解する
3　日常生活行動の自立に向けた援助ができる
4　患者と自己の相互関係を理解し、受容的に関わることができる
5　地域医療福祉活動の実際を学び、地域で生活している精神障害者を理解する
6　保健医療福祉チームの連携と看護の役割がわかる

Ⅲ　実習の構成：９０時間（２単位）

精神看護学実習
- 精神科病棟に入院している人の看護
- 地域で生活している人の看護

実習内容	実習施設	実習時間
1　精神科病棟に入院している人の看護 2　外来に通院している人（デイケアを利用している人）の看護	新発田病院精神科病棟 デイケア外来	９日 デイケア外来（半日）
1　地域で生活している人の看護	精神障害者社会復帰施設	２日（１６Ｈ）

Ⅳ　実習内容

実習目標	行動目標	実習内容
1　精神に障害のある患者とその行動を観察し、行動の意味を判断し理解する	1）対象の行動・対人関係・思考の特徴を観察できる 2）対象の精神症状の観察、判断ができる 3）対象が発病に至った契機・経過がわかる 4）対象に行なわれている治療目的とその効果がわかる 5）家族関係やキーパーソンがわかる	①　患者の表情、行動、言動、他患者との人間関係、患者の外見（服装） ②　精神障害の観察（うつ状態、幻覚妄想、拒絶、無為） ③　発育歴、生活歴、発症の時期、症状、治療の経過、病気の受け止め方 入院形態、 ④　薬物療法、精神療法、レクリエーション、心理療法 ⑤　面会状況、家族との関わり
2　入院患者の治療的環境（処遇）を理解する。	1）患者の人権擁護と安全のために生活する環境がわかる 2）代理行為とその意味について知る 3）行動制限とその意味について知る	①　病棟の構造・設備、病棟の開放と閉鎖、保護室、病室環境の配慮、面会、外出、外泊の方法 ②　代理行為：金銭、私物の管理、通信
3　日常生活行動の自立に向けた援助ができる。	1）精神状態が日常生活行動に影響しているかアセスメントする 2）看護上の問題を挙げ、個別的な具体策の計画が立案できる 3）具体策に基づき、看護援助が実施、記録ができる 4）援助の結果を評価できる	①　対象の年齢と発達課題、入院期間、疾患の程度などと陰性症状・陽性症状の解釈 ②　薬物療法の副作用と精神症状 ③　声かけで可能、部分介助が必要 全介助が必要 ④　食事、排泄、清潔などセルフケアレベル

4　患者と自己の相互関係を理解し受容的に関わる事ができる	1）患者と関わる機会を適切にもつことができる 2）患者のパーソナリテイを考慮し相手を尊重した態度で関わることができる 3）患者に対する自分自身の感情・意志・思考を客観的に見つめることができる	①　自分自身の感情・意志・思考の表現 ②　言語的、非言語的コミュニケーション ③　プロセスレコードの記述 （自分自身の感情、意思、思考表現 自己洞察）
5　地域医療福祉活動の実際を学び、地域で生活している精神障害者を理解する	1）デイケアを目的、活動内容がわかる 2）精神障害者への生活訓練や就労支援の内容を知り、社会復帰への支援を理解する	①　デイケアの日課、関わり方 ②　施設の活動内容と支援の方法の実際 ③　利用者の行動 ・表情、動作、参加状況 ・他の人々との交流、コミュニケーションの持ち方、過ごし方 ④　利用者の社会資源（経済的支援・自立支援法）の利用
6　保健医療福祉チームの連携と看護の役割がわかる。	1）保健医療福祉チームの連携の実際がわかる 2）地域に生活する精神障害者の看護について考える	①　ノーマライゼーションの理念 ②　保健医療福祉チームメンバーの職種と連携のとり方 ③　家族への支援方法

Ⅴ　実習方法

1　精神科病棟

1）受持ち患者１名を決め、看護過程のプロセスに沿って看護を展開し実習する

2）病棟で行なわれている活動（レクリエーション、作業療法、ＳＳＴなど）に参加する

3）自分で体験した患者との一場面をプロセスレコードにまとめ、グループで検討する

4）受持ち患者以外にも、患者の言動・精神症状・治療内容などから精神障害を持つ患者の特徴を学ぶ

5）デイケア実習を病棟実習期間中に行なう（２グループに分かれ、午前半日の実習）

2　精神障害者社会復帰施設

1）施設で行なわれている作業・活動を施設に来ている対象と一緒に行なう

2）実習後半の２日間で実習する

Ⅵ　実習記録

1　精神看護学実習評価表

2　精神看護学実習の学び

3　受け持ち患者記録

- 基礎情報
- 全体像
- アセスメント
- 看護計画
- 看護実践の評価
- 毎日の実習記録
- プロセスレコード

4　精神障害者社会復帰施設実習の学び

5　課題学習

6　看護技術経験録

Ⅶ　実習評価

実習評価表に基づき、出席状況、実習内容、態度、実習記録により、総合して評価する

在宅看護論実習

在宅看護論実習

Ⅰ　実習目的

地域の中で生活する対象者と家族に対して、適切な看護が実践できる基礎的能力を養う

Ⅱ　実習目標

1　在宅で療養する個人とその家族の健康レベルと生活に応じた看護を理解する

2　在宅療養を支える社会資源の活用の実際を理解する

3　透析療法を受けている対象の生活状況の理解と透析療法の一連の流れを理解する

4　在宅療養にかかわる関連職種との連携の実際を理解する

Ⅲ　実習の構成

２単位　（総時間数　９０時間）

在宅看護論実習
- 訪問看護実習
- 在宅介護支援実習
- 透析見学実習
- 入院支援・退院支援実習

実習内容	実習施設	実習日数
訪問看護実習	訪問看護ステーション	７日
在宅介護支援実習	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター	２日
透析見学実習	県立新発田病院	１日
入院支援・退院支援実習	新発田病院・リウマチセンター 地域連携センター	１日

Ⅳ　実習内容

目標	行動目標	実習内容
1　在宅で療養する個人と、その家族の健康レベルと生活に応じた看護を理解する	1）訪問看護ステーションの機能と役割について述べることができる	（1）訪問看護ステーションの概要について学ぶ
	2）在宅で療養する個人の身体的・精神的・社会的な状況について述べることができる	（1）療養者の情報収集と把握 ①疾病、症状、治療内容、病歴 ②生活環境 ③日常生活動作 ④社会資源の活用の有無 ⑤インフォームド・コンセントと自己決定 ⑥権利擁護（アドボカシー） ⑦生きがい、価値観
	3）看護の対象は療養する個人とその家族であることがわかり、両者を「1単位」としてとらえることができる	（1）療養者と家族の生活スタイル・価値観の把握 （2）家族の健康状態、精神的負担の度合い、当面の悩み、生活への影響などの把握
	4）在宅で療養する個人を支える「介護力」について述べることができる	（1）介護力の把握 ①介護の知識と技術の内容 ②介護の意欲、使用できる時間、体力、理解力、介護の工夫、介護協力者の有無 ③介護者の健康状況、精神的負担の度合い
	5）在宅で療養する個人と家族を「生活者」としてとらえ、抱えている健康問題を解決するための必要な援助について述べることができる	（1）療養する個人と、家族の問題点の把握 （2）必要とする看護の把握 （3）看護師との同行訪問により生活状況の観察と援助 ①呼吸：環境調整、吸引、在宅酸素・吸引を必要とする人と家族への指導等 ②食事：必要な栄養素、水分量、食事摂取能力の判断と食事内容、摂取方法の工夫等 ③排泄：排泄環境の調整、排泄障害がある人への自立の援助と工夫、尿路感染の予防と指導、排泄に伴う心理的負担等 ④清潔・衣生活：清潔行動への自立の援助と工夫（入浴介助、寝衣の交換、口腔ケア等） ⑤コミュニケーション：コミュニケーション手段の理解と工夫等

実習目標	行動目標	実習内容
		⑥活動・休息：安楽な体位、移動動作の自立援助と家族への指導等 ⑦安全：誤嚥の予防、転倒・転落の防止等 ⑧服薬：服薬状況の把握、副作用の早期発見に対する療養者と家族への指導、服薬方法の工夫と指導、医師と薬剤師との連携等 ⑨介護者への援助：介護方法の助言、精神的支援、資源の活用等
2　在宅療養を支える社会資源の活用の実際を理解する	1）居宅介護支援事業所・地域包括支援センターの機能と役割について述べることができる	（1）居宅介護支援事業所の活動内容 （2）地域包括支援センターの活動内容 （3）居宅介護支援事業所･地域包括支援センターの職員と同行訪問し活動内容の見学
	2）在宅療養に必要な社会資源の種類と活用方法について述べることができる	（1）社会資源の種類と職種 ①医療保険と介護保険 ②介護認定の基準と居宅サービス ④介護支援専門員（ケアマネージャー）と人的資源の活用 ⑤介護用品・介護機器の利用方法
3　透析療法を受けている対象の生活状況の理解と透析療法の一連の流れを理解する	1）透析開始から終了までの一連の流れがわかる	（1）透析療法の原理
	2）透析療法を受けている病態生理及び生活指導の必要性がわかる	（1）透析患者の病理的状態 （2）透析患者の生活状態と生活指導
	3）透析療法を受けている対象の在宅での生活を考えることができる	（1）透析患者の心理的状況 （2）社会資源の活用
4　在宅療養にかかわる関連職種との連携の実際を理解する	1）施設内（病院）看護と在宅看護との連携の必要性について述べることができる	（1）継続的な医療の提供における看護師の役割 （2）継続的な医療の提供における看護の機能 （3）関連職種との連絡調整の方法 （4）入院支援と退院支援・退院調整

Ⅴ　実習方法

1　実習開始前オリエンテーション（学校で実施）

1）実習の講成、実習施設の概要

2）実習目的・目標、実習時間、日程

3）実習記録

4）実習上の留意事項

5）事前学習・追加学習

2　実習の展開

1）居宅介護支援事業所・地域包括支援センター

（1）職員の在宅訪問・介護相談等に同行し、職員の役割を把握する。

（2）地域で行われている、介護予防や介護支援・相談の実際を見学する。

2）訪問看護ステーション

（1）訪問前に立案されている援助計画について把握する。

（2）訪問看護師に同行し、見学介助を行いながら援助の実際を経験する。

＊事例によっては、情報把握から実施までの看護過程にそった学習をする。

（3）介護者の介護方法を尊重し、家庭内の物品を有効利用して日常生活の援助を実施する。

（4）実習期間中に継続して訪問できる事例があれば、実施できる援助技術については指導のもとに援助を行う。

3）透析見学実習（資料）

（1）透析開始前の準備から終了までの一連の流れを見学する。

（2）対象者の状態を考えながら、コミュニケーションをとる。

（3）グループで情報交換をし、学習を深めるとともに共有する。

4）入院支援・退院支援実習

（1）地域連携センターの見学。

（2）入院支援・退院支援の実際について説明を受ける。

Ⅵ　実習記録

1　実習評価表

2　在宅看護論実習の学び

3　訪問看護ステーション実習記録

4　地域包括支援及び在宅介護支援実習記録

5　透析見学実習記録

6　入院支援・退院支援実習記録

7　看護実践記録

8　事前学習・追加学習

Ⅶ　実習評価

実習評価表に基づき、出席状況、実習内容、態度、実習記録等を総合して評価する。

透析見学実習

Ⅰ　実習目標

透析療法を受けている対象の生活状況の理解と透析療法の一連の流れを学ぶ

Ⅱ　行動目標

1　透析療法開始から終了までの一連の流れがわかる

2　透析療法を受けている対象の病態生理および生活指導の必要性がわかる

3　透析療法を受けている対象の在宅での生活を考えることができる

行動目標	実習内容
1　透析療法開始から終了までの一連の流れがわかる	1）透析開始前の準備 ・体重測定（ドライウエイトを求める） ・血圧等の自己チェック 2）透析開始から終了まで ・器械装着～回路操作見学　・シャント部への刺入、除水量 3）透析中の観察点の把握 ①観察項目 ・バイタルサイン（特に血圧低下） ・一般状態（顔色、気分不快、嘔気など） ・シャント部の状態、血管痛　・皮膚掻痒感 ・同一体位による腰背部痛　・回路・モニター等 ②看護師の観察・援助の見学 4）透析終了後の観察点の把握 ・シャント部の消毒・止血確認　・血圧測定、一般状態 ・体重測定（ドライウエイトになったか）
2　透析療法を受けている対象の病態生理および生活指導の必要性がわかる	1）透析療法前後の検査データ、体重変化から生理的変化を理解 2）生活指導のポイント
3　透析療法を受けている対象の在宅での生活を考えることができる	1）透析療法を受けることによる生活への影響 2）透析療法を受けている心理状態 3）透析療法を受けることによる社会生活への影響 4）透析療法を受けることによる家族への影響 5）社会保障制度の利用と経済的側面

Ⅲ　実習方法

1）事前学習

・腎臓の解剖・生理機能、透析適応となる疾患・その経過

・透析療法の種類と原理、透析療法と合併症

・透析療法中の日常生活上の注意点（食事面と体重コントロール、シャントの管理など）

2）指導者の指導のもとで実習を行う。

透析療法を受ける患者の治療・処置・看護の見学、コミュニケーションを通して学ぶ。

統　合　実　習

Ⅰ　実習目的

修得した知識と技術を統合し、対象のニーズに応じた看護をチームの中で実践する力を身につける

Ⅱ　実習目標

1　複数患者を受け持ち多重課題のなかで必要な看護の優先順位を判断し時間管理ができる
2　病棟における医療安全対策の実践を通して、安全管理体制について理解できる
3　夜間における患者の療養生活や看護援助の実際について理解できる
4　病棟における看護管理の実際を知り、看護師としてのメンバーシップ及びリーダーシップについて理解できる
5　保健医療福祉チームにおける他職種との協働の中で、看護の役割が理解できる
6　専門職として倫理的指針のもと行動し、看護者としての自己の課題を明確にできる

Ⅲ　実習構成　　３年生後期　９０時間　（２単位）

１．病棟の看護管理業務見学実習、チームリーダー業務見学実習、スタッフ業務見学実習

２．複数の患者を受け持ち、看護を展開する実習

３．夜間実習（看護業務見学実習）

Ⅳ　実習施設

実習施設	実習場所
新発田病院 リウマチセンター	病棟

Ⅴ　実習内容

実　習　目　標	行動目標	実習内容
1 複数患者を受け持ち多重課題のなかで必要な看護の優先順位を判断し時間管理ができる	1) 受け持ち患者の病状変化による治療方針を知り、看護計画に基づいた援助を実施できる 2) 援助実施の可否、看護の優先度を判断できる 3) 複数患者に対する看護の優先順位と時間管理を考えた看護を実施できる 4) 担当看護師と連携（報告・連絡・相談）を取りながら、患者の状態に合わせた看護を実施できる 5) 援助の効率性、時間の経済性、安全・安楽性を考えて実施できる 6) 受け持ち患者の状態について、次の勤務帯へ引き継ぎできる	1. 受け持ち患者の総合的な理解（患者理解・看護問題解決の実際） 2. 患者援助の優先度の考え方時間調整の仕方・援助方法 3. 看護計画の実践と評価 4. 検査・治療の時間確認と援助実践の調整 5. 適時・適切な報告・調整 6. チームの一員としての自覚と責任感および倫理観 7. 準夜勤務担当者への引き継ぎ
2 病棟における医療安全対策の実施を通して、安全管理体制について理解できる	1) 病棟で行われている医療安全対策の実際を理解できる 2) 病棟で行われている医療安全対策を受け持ち患者に適用できる 3) インシデント発生時の対応がわかる	1. 環境整備・ベッド柵・安全マット等の使用、工夫 2. 患者確認のための対応 3. 医療事故防止対策マニュアル 4. インシデント発生時の対応
3 夜間における患者の療養生活や看護援助の実際について理解できる	1) 準夜勤の業務内容、勤務体制がわかる 2) 夜間における患者の療養生活とその援助について理解できる 3) 夜間の検査・処置時の看護の実際が理解できる	1. 夜間の検査、処置 2. 夜間の日常生活援助 3. 家族面会時の患者の反応 4. 夜間の患者の心理 5. 夜間の患者の安全確保 6. 夜間の病棟管理体制
4 病棟における看護管理の実際を知り、看護師としてのメンバーシップ及びリーダーシップについて理解できる	1) 病棟管理者の役割と業務内容を理解できる 2) 看護チームリーダーの役割とその実際を理解できる 3) 看護チームメンバーの役割とその実際を理解できる	〈師長業務〉 1. 業務の効率化を図る組織 2. 看護サービス提供のための看護方式 3. ベッドの効率的な運用と病床管理 4. 他部門、各課と必要な連絡調整 5. 安全、衛生、かつ快適な環境整備 6. 事故発生時の対応 7. 職員の勤務計画、勤務時間管理の実際、健康管理 8. 看護部組織における報告、連絡、調整の実際 〈リーダー業務〉 1. 医師への報告・連絡調整 2. チームおよびスタッフへの連絡調整 3. 病棟内外の連絡調整 〈スタッフ業務〉 1. 医師への報告・連絡調整 2. チームメンバー間の協力、調整方法 3. 複数患者援助の調整方法、優先度決定、援助・記録の実際
5 保健医療福祉チームにおける他職種との協働の中で、看護の役割が理解できる	1) 看護師と他職種との連携の実際を学ぶ 2) 師長・リーダーの役割から、他職種との連携の必要性がわかる 3) 保健医療福祉チームの連携場面から、看護の役割を理解できる	1. 医師、理学療法士、薬剤部、栄養課、ケースワーカー等との院内連絡・調整 2. ケアマネージャー、訪問看護ステーション等との院外連携 3. チームおける看護の役割
6 専門職として倫理的指針のもと行動し、看護者としての自己の課題を明確にできる	1) 看護倫理を意識した行動をとることができ、実践した看護について責任をもつことができる 2) 実際の看護援助場面を通して、専門職としての自己の課題を述べることができる	1. 看護者の倫理綱領 2. 患者・家族を尊重した対応・言葉使い 3. 援助に対する責任、プライバシーの保護

Ⅵ　実習方法

1　業務見学実習

1）看護師長の業務を見学実習する

2）リーダーの業務を見学実習する

3）スタッフの業務を見学実習する

2　複数患者を受け持ちと１日のケア計画の展開

1）患者を２名受け持ち、実習を展開する

2）学生は病棟の看護計画に沿って看護実践する

3）患者の状況をその都度判断し、援助の留意点・方法を状態にあわせて実践する

4）患者の援助の優先順位を決定し、時間管理に対応した実践ができる

5）チームで進められるケアに参加し、看護実践する

3　夜間実習

1）夜間勤務帯で実習を行う

2）夜間実習の翌日は原則休みとする

3）夜間実習は見学実習とする

4　看護技術の修得

1）診療の補助技術を重点に、技術経験録の未修得項目を修得する

2）患者の状態にあわせた援助方法を検討し、技術体験をする

Ⅶ　実習記録

1　統合実習評価表

2　統合実習の学び

3　業務見学実習記録

4　受け持ち患者記録

5　事前・追加学習

6　技術経験録

Ⅷ　実習評価

実習評価表に基づき、出席状況、実習内容、態度、実習記録等により総合して評価する

実習評価表に基づき、出席状況、実習内容、態度、実習記録等により総合して評価する